

蠟の翼

水野希

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生とはなんぞや。死とはなんぞや。

晴天の霹靂で赤子になった少年。

抜け落ちた記憶。体に宿る謎の力。人外に成り果てた己の運命に彼は何を見出だすのか。

って感じの話にできたらいいなー（あくまで希望）

なんとなくデートアライブでオリ主モノ。

作者はど素人ですので、読む価値のある駄文か、はたまたゴミ箱一直線の落書きかは、読者の皆様の自由でございます。

目次

前書き代わりにプロローグ	1
自己紹介代わりにモノローグ	4
1-1 十香ロールアウト	8
1-2	17
1-3	32
1-4	48
1-5	65
1-6	83
1-7	98

前書き代わりのプロローグ

緊張、恐怖、そして高揚感。それら全てが緋い混ぜになった膨大な熱が、身体を包みこんでいる。

身に纏うのは鋼鉄の鎧。手に持つのは鈍色の刃。数メートル離れた目の前には、自分と同じように武装した強大な敵。お互いに少しの物音も発することなく、ただ静かに相手を見据えて動かない。

戦闘のために作られた空間から少し離れた場所からは、多くの眼差しが二人をじっと見つめている。

向かい合う両者の間に邪魔となる障害物は一切無く、唯一あるのは、今まさに繰り広げられようとされている戦いの雰囲気だけ。

正面から視線を外さないまま静かに刃を構えると、相手も同じく腰を落とした。

知らず知らずの内に止まっていた呼吸を吸い込み、僅かに開いていた口の隙間から大きく吐き出す。

フツ

偶然にもタイミングが重なり、静寂の中で大きく響いたその音は、始まりの号砲に代わって、戦士達を突き動かした。

凄まじい勢いでこちらへ突進してきた相手は、何処からともなく長大なライフルを取りだして構え、ほんの一瞬の間に三度引き金を引く。

ギリギリで視界に捉えた三発の銃弾を、二発は素早く体を翻すことで回避し、残る一発には刀の腹を当てて受け流す。刀から腕へと衝撃が伝わり、直撃は避けた筈にも関わらず、強い痺れが右手を支配した。自分にとってはその時点で既に紙一重の攻防であったが、銃を持つ敵からして見ればただの牽制に過ぎず、再び引き金が引かれる。

その数は先ほどより多い五発。ひとつひとつが的確に自分の急所を目掛けて飛来していた。

左右に躲そうとするも、まるでそれを予感していたように、相手はさらに横一列に銃弾を放つ。

選択肢を潰されたことに小さく舌打ちをしながら、急いで脚に力を

込めて、真上へと大きく跳躍を試みる。

しかしその行動も間に合わず、右足の間接部に敵の弾が直撃し、腕のそれとは違う明確な痛みが膝の感覚を麻痺させ、思わず瞼を閉じてしまう。

痛みに顔をしかめながら瞳を開けると、眼前には至近距離まで迫った敵の姿が。

遠距離攻撃に徹されれば自分に勝ち目はない。即ち、相手からこちらに突撃してくれるこの状況は好機とも言える。だが、自分は今空中に居る。脚の痛みもまだ引いてはいない。もしここで敵に攻撃を当てられなければ、着地の隙を狙って今度こそ銃弾の嵐に見舞われるだろう。

まだ戦いが始まってほんの数秒だというのに、自分はもう窮地である。その事実が心が負けそうになるが、幸いにもこの身を守っている鎧は硬く、例えここで敵のライフルに撃ち抜かれても、肉が消し飛ぶことはない。

距離を詰めてくる影に、回避や防御をしたくもなるが、今自分がとるべき行動は、迎撃することのみ。

未だ残る腕の痺れを無視して、無我夢中で刀を上段に構え、襲いかかる敵に全力で降り下ろした――

「.....ふう」

そこまで書き終え、ノートパソコンのキーを叩いていた手を止めた。

時計の針は丑三つ時を指し、閉めきった窓からは、どこかで鳴いている犬の遠吠えがうつすらと聞こえてくる。

僕ひとりしか居ない賃貸マンションの一角。ミニマリストもかくやというレベルで物の少ない部屋の中心に寂しく置かれた座椅子に座り、目の前のパソコンの画面を眺めたため息をつく。

我がことながら、自分の文才の無さには呆れてしまいそうになるが、これでも以前よりはいくらかマシになっているのだ。

初めて小説を書こうと思った10年前頃の文章は、節々から厨二感が漂っていて、なかなか酷いものだった。語彙力が足りないせいで地の文は短くなり、会話文もキャラクターの個性を引き出し切れていない稚拙なやりとりに過ぎなかった。まあ、その点は今も大して変わったとは言えないのだけれど。

あんな体験をした自分であれば或いは、俗に言う「オリ主」にだってなれるんじゃないか。

すぐに消え去ったそんな幻想を、自分のイメージする「主人公」が登場する小説などという偶像に昇華させようとして、それは10年経った今も続いているのだから、僕も大概に好き者であると言える。

そう、10年。もう10年以上も過ぎたのだ。時の流れは無情で、本当に平等なのかと疑いたくなる程早く感じてしまう。

ペンを取るようになったのは5歳くらいだったので、あれからもう15年の月日が経っていたことになる。15年といえば、産まれたての赤ん坊が高校生になるまでの期間。そう考えれば、それは余りにも長い。僕にとってその例え方は、文字通りそのままの意味のただけ。

そこでふと考える。考えてしまう。

もしあの時「天上天下唯我独尊」とでも言っていれば、僕はこの世界に復活を果たした救世主として、今とは違う、華やかな日々を送って居たのだろうか。

平凡とは対極にある人物として、崇め奉られながら生きて行く可能性もあったりしたのだろうか。

そんな、とりとめの無いにも程がある、下らない思考のせいで、僕はその日あの時のことを思い返すのだ。

僕という人間が、死の概念を忘れてしまった瞬間を。

自己紹介代わりのモノローグ

吾輩は、否。僕は人である。たぶん。

名前は本来まだないのだが、この情報社会において名無しはあまりに不便なので、便宜上、百目鬼智也へどうめきともや〜と名乗って、戸籍にもそう記している。

どこで生まれたかは見当をつけるまでもない。何の変哲もない地方都市の小さな病院でオギャアオギャアと産声をあげたのをはつきりと記憶している。

僕はここで初めて母というものを見た。酷く華奢な体つきだったが、美しく、力強い笑みを湛えた女性だった。

然しその母は僕を産んですぐに命を落としたそうだ。それを僕は、普通の赤子のふりをして狸寝入りしている最中にわかenに騒がしくなった病室の空気と、僕を抱きしめていた細腕が脱力したことから察した。

この世に僕を誕生させてくれた偉大なる母を早々に喪失し、その事実ギリギリと心を痛めながらも、僕は自分が置かれた現状の把握に努めた。

まず行ったのは記憶の整理である。

僕にはかつて僕であった者の記憶が、俗にいう前世の記憶があった。

その記憶の中における僕は高校生だった。美食に舌鼓を打ち、心地よい惰眠を貪り、学校で友人と雑談し、女性に好かれることを夢見る、一般的な思春期の男子高校生だ。今の僕が名乗っている百目鬼燈也という名は、元々この前世の彼のものである。

彼の記憶の古いものから順にたどってみたが、百目鬼氏が何らかの要因で死んだという内容のものは残念ながら存在しなかった。

前世の記憶において最新のものだったのは高校の卒業式の時で、そこから先はそもそも覚えていない。赤子になったシヨックで記憶に混濁が見られるのか、卒業式中に自覚する暇もなく命を落としたの

かは自分で考えてみてもよくわからないけれど、とりあえず今僕が生まれ変わっている理由の参考になりそうな情報はみつからなかった。

記憶の整理は不発に終わったが、気を取り直して、次の確認に移ろう。

自分の肉体的性能の確認だ。

普通、生まれたての乳児というのはすべての能力が未発達だ。

目蓋は開くことができず、無理に開けたとしても碌に見えないし、動体視力は皆無。自分の腕を持ち上げるので精一杯の脆弱な筋肉に、体重を支えられない骨。感情の種類が興奮一つだけしかない脳。成人と比べれば、それらはあまりにも未熟。

現在絶賛赤ん坊の僕もその例からは漏れないはずなのだが、そうだとすると、こうしてあれやこれやと思考ができてるのはどう考えでもおかしい。あくまでも僕の主観でだが、この思考能力は記憶の中における最後の時期である高校生当時に匹敵している。おそらくは百目鬼氏の記憶を引き継いだことが原因だろうか、どうやら僕は見た目は子供頭脳は大人のな状態なようだ。

こうなってくると、ある一つの懸念が新たに生まれる。すなわち、百目鬼氏から受け継いだのは思考能力だけなのだろうか、というものである。

結果から言えば、その心配自体は杞憂ではあったものの、やはり転生の代償は存在していた。看護師たちによって行われた身体検査で、色々と常軌を逸した結果が出たのだ。

とは言っても、成長期を終えた高校生並の筋力やら骨格やらを有していた訳ではない。一般的な新生児に比べれば遙かに強固であったのは確かだが、その肉体の検査結果にとは別に精密検査をしたことで、一つの事実が明らかになった。その事実こそが看護師たちを最も驚かせた。

僕の肉体を形作る細胞は、一つ残らず不死化を起こしていたのだ。

そも、細胞には不必要な増殖を抑える能力があるのだが、その能

力が制限されてしまうことを不死化という。

細胞と言うのは、テロメアという物質によりその分裂できる回数に限りが設けられてある。細胞分裂の回数制限は、細胞にとっての寿命と言い換えてもいいだろう。

しかし僕の細胞はあらゆる機能が異常活性化しており、本来は消耗しては修復されると言うサイクルを繰り返す次第に短くなつていくテロメアが、一切消費されなくなっているのだ。

不死化した細胞は際限なく増殖するようになり、それがいわゆる癌細胞に変化したりして体を蝕むもののだが、どういうわけか僕の細胞は不死化こそしているが、悪性に変化する可能性は低いらしい。盗み聞いていた医師たちの会話いわく、無秩序に分裂していてもおかしくない僕の細胞はしかし、まるで理性を持っているかのようにその活動を「自粛」していて、今後も暴走の危険性は無いとみていいのは、とのことだった。

医学知識の無い僕に理解できた話はここまでで、それからも医師たちの議論は続いていたのだけど、少なくとも死の危険はなさそうだと安心した僕は次の思考を開始した。

つまり、今後のことについてだ。

この時すでに母が天に召されてから数時間が経過していたが、未だ父親が現れる雰囲気は無く、看護師たちの会話にも父は登場しない。となれば、僕には父親が居ないとみるのが妥当だろう。もちろん、それだけの根拠で父親がこの世に居ないと断じる気はなく、しばらくは様子を見るつもりではあったのだけれど、数日後、僕の予想が間違っていないことが思わぬ形で判明した。

僕は、親を持たぬ子供として養護施設に入ることとなったのだ。

僕としては突然変異した希有な人間としてモルモットにでもなるのかと戦々恐々としていたが、どうやら僕の母は余程の人格者であつたらしく、看護師たちが僕に向かって母の冥福と僕の幸せを願ってくれていたのが聞こえていた。もしかしたら、彼女らが色々取りはからってくれたのかもしれない。確証は何も無いけれど、きつとそうだと信じたい。

とにかく、だ。

そうして僕は施設で生きていくことになった。今後のことについての問題は解消した。

人として通常あり得ない状態で生まれてきておきながら、普通の人として生きていくことを許されたのだ。

狸寝入りをしつつ心の中でもうこの世にいない偉大なる母や、二度と会わぬであろう優しき看護師たちに感謝の念を捧げ、僕は病院から養護施設へ運ばれたのだった。

前世の記憶があることをひた隠しにし、精神年齢の高さを偽り、与えられた幸せを享受し続けること、十五年と少し。

今年から高校生となる僕は、今までの生活に区切りをつけ、世話になった施設を離れて新天地へ旅立つ。

華やかな青春を、薔薇色の未来を、二度目の人生にもたらすため。周りを欺き続けた平凡で窮屈な日々にも別れを告げて。

かつて大災害に見舞われ瓦礫の山となり、最新技術を以て実験都市へと進化を果たした町。

僕の新たな居場所、
天宮市に。

1—1 十香ロールアウト

『……まして』

……

『……目を覚まして』

……聞いたことなど一度も無い、けれどどこか懐かしいような声。

『……あなたは、これから始まるのだから』

どこから響き、なぜ僕に訴えかけるかもわからないその声が

『……さあ、もう起きる時間よ……』

僕を、優しく追い立てる。

『……さあ』

せめて、嗚呼せめて

「後……五分……だけでも……」

四月十日。

一年の中で唯一嘘が許される日からしばらく経った月曜日

「……むにゃ……むっ……むっ……」

暖かかくも少し肌寒い三月が終わり、新しい日々がやってくる年度
変わりの季節。

多くの学校や企業では、四月に入ってしばらく経ったこの時期がある種の区切りとされる。

この日を境にして次のステップへ進む人々は、まだ見ぬこれからに胸を膨らませていることだろう。

「むむっ……むむむっ……」

僕こと、百目鬼智也もまたそんな人達同様に新生活を心待ちにしていたが。新年度の記念すべき一日目の朝。その心境は、決して麗らかではなく。

「……ああ……あああああつ」

それどころか

「寝過ぐしたあああああつ！」

むしろ、最悪だった。

今年で築三十年を迎える鉄筋コンクリート造りの賃貸マンション「フロースト天宮」の101号室。まだ一昨日に諸々の手続きを完了させ晴れて我が城となり引越してきたばかりなので、生活感はずり片も無い。当然家具家電の類いは皆無。ミニマリストもかくやの質素ぶりだ。

大通りから少し離れた場所にあるため少々交通面に難があるが、浴室乾燥機付きの風呂場。最新ウォシュレットのトイレ。東と南に二つある大窓。梯子で登れるリフトのある12畳のリビング等々。なかなかの好条件で家賃が7万だったので即決した物件である。しかし、未だその真価を發揮できてはいない。

決め手の一つになったものの、まだカーテンのひとつも付いていない窓から、まぶしい黄金色の日の光が何に遮られるでもなく降り注ぎ、高い位置から無機質な枠を通って燦々と顔面に差し込んでいる。薄く開いた目蓋からナイフのように鋭く瞳孔に刺さった直射日光が、未だ微睡みの中にいた僕の意識を覚醒へと導き、昨日立てた計画が破綻していることを知らしめた。

季節は花々の咲き誇る春真っ盛り。冬から次第に日の出の時間が早くなっているとはいえ、今の太陽の位置は真上に近い。これだけ陽が高いということは、予定していた起床時刻である六時四十五分をもうだいぶ経過していることの証左だ。

窓と同じく無機質なフローリングのままの部屋の真ん中に直接敷いてあった布団からガバツと体を起こし、窓と反対側の壁のフックに掛けてある百均の小さな紫色の時計を急いで確認する。短針が指し示していたのは、12より少し手前。長針は左に真っ直ぐ。すなわち、午前11時45分。

大遅刻であった。

「っーそんな……………いいや……………まだ間に合う……………！」

昨日、今期の深夜アニメの初回放送をリアルタイムで見ようとした

のがいけなかったか。

一流のオタクならそれが当然、などと粋がったことを考えたが故の失策だ。それもこれも、今期から始まる「運命く零く」の期待値が高すぎるのがいけないのだ。

尚、その作品は当たり前だった模様。

作画が神っていた。

閑話休題。

都立来禅高校。

それが、僕がこれから通うこととなる高校の名前である。

僕が居を移した天宮市は、今から約三十年前に巨大な空間震に襲われた街だ。

空間震とは、読んで字の如く空間に作用する震動災害のことで、十年前にユーラシア大陸中央地帯で初めて発生し、それ以降日本を中心に世界各国で頻発している。発生するタイミングの推測は完全に不可能。原因も全くの不明。地球温暖化の影響の一つだの、宇宙人の攻撃だの、果てには神の裁きの鉄槌だのと、非常に様々な憶測がなされているがどれも眉唾ものの域を出ないままで、はつきりしているのは唯一つ。原因がなんであれ、空間震が起きるたびに街は崩壊し、そこに住む人々は命の危機に直面するということ。それだけでも、空間震が迷惑極まりない現象であるのは明らかだろう。

天宮市は、そんな天災である空間震に対する防衛能力が非常に高い。三十年前に一度更地になってから、最新鋭の技術を大量に用いて再開発がなされたため、空間震から身を守るための地下シェルターもほぼ一家にひとつは備わっている。

来禅高校はそういった再開発計画の一部として作られた学校なのだ。地下シェルターは全校生徒を収容してもまだあまりある程巨大で、それ以外の設備も都立とは思えないレベルで充実している。ある意味、日本一安全な高校と言っても過言では無いだろう。当然、それまでに恵まれた環境の学校であるなら入学倍率も相応に高くなっており、平均偏差値も決して低くはないのだ。僕も決して頭が悪いわけでは無く、どちらかと言えば良い方ではあるのだけど、それでも入試

テストでは冷や汗をかく場面にもいくつか遭遇した。無事合格していたと解つたときは思わずガッツポーズをしたほどだ。

僕は今日新たな一步を踏み出す。人生の転換期を迎え、大人への階段を上るのだ。高校生活と言えば多くの物語の舞台となる時期である。前世における高校生活はずいぶんと乾燥気味だったが、今の僕は全力で楽しむつもりでいるのだ。友人を作って歓談し、授業に真剣に取り組み、出来れば異性との出会いなんかも。想像が膨らみ、否が応でも胸が高鳴るものである。

しかし、現実是非情だ。その高校のホームルームが開始されるのは午前8時15分。既に3時間以上経過しており、しかも今日の予定は半日。今から行っても帰り際に少し顔を出すだけに終わる。

否。絶望的な現在時刻に諦めてしまいたいそうになるが、だからといって自主休校にするわけにもいかない。たとえ昼になってからでも登校した方がまだましだ。初日から遅刻も大概悲惨だが、初日から不登校の方が遙かに酷いことになるだろう。僕の夢見た華の高校生活をこんなことで終わらせてはならないのだ。

パン!!と両側の頬を平手で叩くことで寝起きの頭に活を入れ。僕にできうる限りの最高速度で思考を回転させ、シミュレーションを開始。

朝食（いや、もう既に昼食か）を抜き、洗顔と着替えを洗面所にて同時進行で済ますのに約3分。昨日までに入学式やガイダンスを終えて今日からいよいよ授業が始まるが、幸いホームルームやレクレーションが主な予定であり教科書などはまだ必要ないため、荷物は少なくて済み身支度には手間がかからない。

すぐに家を飛び出してバス停に……いや、家の前にあるバス停は本数が少ない。自分の足で走って学校に行く方が早いだろう。

大通りを渡り、住宅街を抜け、坂道を上って校門に至るまでの10km弱の道のり。歩いていては時間がかかるが、走って行けば問題ない。たかだか10kmの全力疾走、僕にとってはそれこそ朝飯前での苦でもないのだから。

そこまで自分がとるべき行動を決定するのにかかった時間は、実に

一秒以下。しかし今の状況ではそれさえも惜しい。

「そうと決まればー」

やることさえわかっているなら簡単だ。布団から跳ねるように勢いよく立ち上がり、廊下を移動しながら寝間着の甚兵衛を脱いで手に持ち、洗面所へ入る。

洗面所の鏡に映った僕の顔はいつも通りの三白眼だ。163cmの低身長。ショートカットにした猫っ毛の髪。モデル並みに小さい顔。無駄な脂肪は無いが必要な筋肉も無い体つき。今時の言い方をするなら小動物物的であるとさえ表現できる程、全体的に小柄な体躯の持ち主である僕だが、そのイメージとは裏腹なこの目つきのせいで周りから敬遠されてしまい、昔から友人作りが苦手だった。

いつになってもあまり好きにはなれない自分の目に少しばかり気分が陰鬱なものになりかけるが、そのストレスを振り切るように脱いだ甚兵衛を洗濯機へと突っ込んで蓋を閉め、若干乱暴気味に洗濯開始のスイッチを押す。

洗面台の隣でハンガーに掛けてあったブレザータイプの制服一式を手に取り、シャツ、ズボン、ベルト、ネクタイの順に身につけて、残った上着もきっちり前のボタンを閉める。今一度鏡の方へと目を向けると、そこには少し大きめの制服に着られている男子生徒の姿があった。最後に軽く顔を洗い、出発の支度が完了する。

廊下の片隅に置かれていた、前日までのガイドンスのプリントが入ったままの学生鞆の持ち手を左手で引っ掴みながら進み、開いている右手で素早く玄関扉のドアノブを回す。

「行ってきますっ」

誰が聞いているわけでも無いが何とは無しにそう挨拶をして、僕は力一杯に地を蹴って学校の方向に駆けだした。

今日の空は、つい何かいいことがありそうだと思ってしまうくらい、美しい青色に晴れ渡っていた。

あ、玄関の鍵閉めんの忘れてた。

一体何分間走って居たのだろうか。体感ではだいたい三十分くらいだったが、実際のところはもつと長かったかもしれない。商店街や住宅地といった街並みを横目に駆け抜け、ついに坂の上に高校の校舎が建っているのが見えてきた。来禅高校は市街地から少し離れた台地に建てられている。よって、通学路の最後には長い坂道が待ち構えて居るのだが、ここまでずつと50メートル走レベルのスピードでノンストップだったというのに、まだ坂道を駆け上るのかと思うと少々億劫だ。

それでも、もうすぐゴールだと自分に言い聞かせてラストスパートをかけようとした、その刹那。

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

「……………っ!？」

大音量のサイレンがけたたましく街中に響き渡った。

「これ……空間震の警報か……?」

遠くの電柱にとまっていたカラスの群れが一斉に飛び上がり、青一色の快晴だった空に不吉この上ない黒い模様を描き出す。

突然の事態に僕も思わず足を止めて、周囲に意識を集中させた。

天宮市に来て日が浅い僕は実際に「本物」を耳にしたことはまだあまり無いが、それでも現代の若者であれば間違いなく訓練やニュースで聞いたことがある。

空間震警報。

空間震には、一般的な地震と同じく前震が存在し、その揺れが観測された際に発令されるのがこの警報だ。通常このサイレンが鳴らされた直後に避難指示が放送され、さらにその数分後かに空間震の本震が到来する筈である。それもまた避難訓練などで習ったことだ。

と、鳴り続けていたサイレンが途切れて、代わりに女性の音声が一泊送れて聞こえてきた。

『これは訓練では、ありません。これは訓練では、ありません。前震が、観測されました。空間震の、発生が、予想されます。近隣住民の

皆さんは、速やかに、最寄りのシエルターに、避難してください。繰り返します——』

聞き取りやすいように一言ずつ区切られた声は、その冷静な声音とは真逆に緊迫した現状を街に知らせた。最寄りのシエルターと言うと、ここからならまず間違いなく来禅高校のシエルターだろう。本震がやってくる前に一刻も早く移動しなければ。

学校へと急ぐ理由が登校から避難に切り替わり、今度こそ学校に続く坂道を駆け上ろうとした、そのときだった。

ふと気づくと、目の前には鬼気迫る形相の青年が学校の方からこちらに全力で坂を駆け下りていて。

「?!?!」

躲すことも出来ず、激突した。

「があっ!!」

「うおっ!!」

衝突したことで左手にあったバックが数メートル宙を舞う。僕自身も大きく体制を崩し、僕が下敷きになって彼もろとも二人で重なるように地面に倒れた。反射的に閉じていた目を開いてみると、視界一杯に映ったのは僕が着用しているのと同じブレザーだった。察するに来禅高校の男子生徒だろう。

体格は僕よりも少し大きい。身長は170cmくらいか。小柄とまでは言わないが僕よりも大きいのはたしかで、そんな彼に乘られているのは中々苦しい。

「つてえ………あつ、わりい!すぐに退く!」

僕の上から飛び退いたことで見えるようになった彼の顔は、とても端正なつくりだった。草食系という奴か。少し長めのショートの前髪に、どことなく女性らしさもあるような顔立ち。その中心には凜々しい瞳が輝いている。しかし、彼のその目には異常なまでの焦りの感情があるように見えた。

「ウチの生徒………?いや、それよりほんとにわるかった!けど今俺急いでるんだ。それじゃあな!早く避難しろよ!」

「ちよ、ちよつとまってください!あなたはどこに行くんです!?!すぐ

避難しないといけないのはあなたも同じでしょう!」

彼の焦燥の仕方は尋常では無かった。空間震が来ると解っているのに、言うが早いのか、立ち上がった途端すぐにどこかへ向かおうとしているようだ。

このまま行かせたら彼の命が危険だ。どう見ても今の彼は冷静で無いと解る。見ず知らずの他人だが、まずこちらに謝罪したことから良識を持った善人のようだ。初対面なのは見捨てて良い理由にはなるまい。そう思った僕は、すぐさま立ち去ろうとする彼を引き留めた。

「何にそんな焦っているか知りませんが、命あつての物種ですよ。一緒にシエルターへ——」

「避難している場合じゃ無いんだ! 妹が街中で逃げ遅れてんだよ! すぐに迎えに行つてやらないといけないんだ!!」

「ん な っ ……!?!」

しかし、その僕の忠言に対し、戻ってきたのは予想の遙か斜め上。彼がどうしてこれ程までに急いでいるのかを理解させるには十分すぎるもので。

そして、見て見ぬふりが出来るものでもなかった。

「それじゃ、もう時間が無いから行かせてもらおうぞ!」

「あ、ちよつと!」

しかし、止める暇も無く、彼は坂を下り街の方へと走り去ってしまった。

彼を追おうにも行き先が分からず、僕は困惑して立ち尽くすばかりだった……が、さつき吹き飛ばされたバックに視線を向けると、その上に見覚えの無い携帯電話が開いた状態で乗っているのが見えた。

「……………これは……?」

ぶつかつた拍子に走り去つた彼のものが落ちたのだろうか。バックがクツション代わりになつていたようで、本体に傷は無い。

何の気なしにその画面を見ると、GPSか何かか、街の地図の中心にマークが付けられている画像が映し出されていた。

その時、彼の言っていた「妹が逃げ遅れている」という言葉を思い

出す。

地図が表す場所は街中のファミリーストランの前。ちょうど彼が向かった方向だ。

「……!!」

それに気づいたとき、僕は思わず走り出していた。

何故かは分からない。自分は元々率先して人助けをするような性格ではない。こんな状況下、自分の命が関わるのならそれは殊更だ。

けれど、あの青年を放っておいてはならないような気がしたのだ。なんだか、誰かに急かされているかのような不思議な気分で、そして、何かが始まるような、そんな予感がしていた。

さあ、もう起きる時間だ。

僕は、これからはじまるのだから。

空間震警報が鳴ってから数分が過ぎた。

やはりこの町の住民達は空間震にかなり慣れているのだろう。避難のスピードは迅速の一言で、今僕達は大通りを走っているのだが人っ子一人見当たらない。街路も、公園も、コンビニも、まるですべての人間が一瞬にして神隠しに遭ったかのように蛻の殻だ。全員とつくにシエルターに移動をし終え、空間震が過ぎ去るのをじっと待っているのだろう。流石はシエルター普及率全国一位の街だと感心するが、目の前のこの光景は少しばかり不気味に過ぎた。

「なんで馬鹿正直に残ってやがんだよ……っ！」

その後、携帯のGPS情報と自慢の体力を頼りに街を走り、無事に青年に追いついた僕は、彼に携帯を返して簡易的な自己紹介を済ませた後、半ば強引に同行の許可を取ったのだった。

五河士道「いつかしよう」という名前らしい彼は、恐らく妹さんへのものであろう愚痴を零しながら息も絶え絶えに走っている。

さしあたり、今の段階で残っている問題は、空間震が来るまでのタイムリミット、そして、

「士道さん、大丈夫ですかっ!？」

「……っはあ……はあ……ああ、大丈夫だっ！」

隣を走る彼の体力だろう。

ここまで一度の休憩も無くやってきたのだから、その疲れは当然だ。息づかいは荒く、胴体は今にも転んでしまいそうな程に前傾姿勢だ。足の動かし方に至っては完全に意地であることが解る。もう限界の筈なのに止まる気配が無いのは、妹への愛があるからか。

……やはり、羨ましい。

いけない。思考が逸れてしまった。今は妹さん救出に集中せねば。

「なんだ……っ、あれ……」

かぶりを振って邪念を散らしていると、士道さんがなにかが目に付いたような声を出した。

「……っつとと。どうかしました？」

「ああ、あの上の方。人影が……」

彼が説明を始めた、ちょうどそのときだった。

「っ?!土道さん伏せて!!」

形容しがたい悪寒が瞬時に全身を駆け巡り、僕の中の本能が最大音量で警鐘を鳴らす。

自分でも説明出来ない予感がして、「何かが来る」ことを第六感で理解させられ、遮二無二土道さんをアスファルトの地面に押さえつける。

「いつ……!?…おい何すんだ離せっ………うわッ!?!」

土道さんからの苦情が耳に響くが、すぐにそれどころでは無くなった。それは――

――自分たちの進もうとしていた先の街並みが、強烈な閃光に包まれたからだ。

直後にやってきたのは、鼓膜を破らんばかりの爆音と、意識を持つて行かれそうになるほどの衝撃波。たまらず目を閉じ、土道さんを押さえる手に力を込めながら、自らも脚を強く踏ん張る。

そうして数秒後、恐る恐る目を開くと、そこにあつたのは到底信じられないような風景だった。

これは、この天災としか言えないような現象は、恐らく。

「一体なんだったんだ……今の」

「状況からして、空間震かと。だって、ほら。見てくださいよ」

「は――?」

僕に組み伏せられ、うつぶせになっていた土道さんが顔を上げるなり間の抜けた声を発したが、宜なるかな。

僕らの眼前に広がっていたのは。否。広がっていたはずの街が。

跡形も無く、消滅していたのだから。

「な、なんだよ、なんだってんだよ、これは……ッ」

比喻でも、冗談でも、まして物の例えなどでも無く。街は瞬く間に廃墟と化した。

街全体が巨大な「何か」に押しつぶされたかの如くである。浅いクレーターのような形状に大地は凹み、確認できる限りすべての建物に

は罇が入り、街灯はへし折れ、電柱は粉碎されていた。

そして、生命の存在していた証拠が消え去ってしまったクレーターの中心。数十メートル向こうの広場に早変わりした地点には。

玉座が、鎮座していた。

「なんだ……？」

士道さんのそのそと立ち上がりながら尋ねる。

「玉座……ですね。ですがそれよりも……」

「ああ、あの子——なんであんなところに」

どうやら士道さんも視認したようだ。

そう、ここで僕らが注目したのは、変わり果てた天宮市でも、ゴーストタウンにあつて違和感しか無い玉座でもない。

圧倒的な存在感を放つ、金属製とおぼしき物々しい玉座の上には、それを上回るオーラを纏った少女が肘掛けに片足を乗せるようにして立っていたのである。

年齢は僕たちとそう変わらないように見える少女だ。腰の辺りよりさらに長く、膝まで伸びている濡れ羽色の髪。細くしなやかな腕。無駄の無い脚線美を描き出す体躯。傾国の美女のようなたおやかさと、あどけない子供の愛らしさを両立させている貌の中央には、深い闇を思わせる妖しさを湛えた瞳が輝いている。

またその少女は不可思議なドレスを着ていた。高貴な紫色を基調とした、豪華絢爛な、しかし機能的な造りであることが窺える、堅牢な鎧のようなドレス。金属なのか布なのか判別できない素材の装甲が少女の華奢な体の至る所を覆い、装甲の無いスカートやインナーの部分には、淡く発光している、と言うより、光そのもので編まれたかのような謎の布地がはためている。

あり得ない。これ程までに美しい存在が、僕らと同じ人間である筈が無い。

そんな考えに至らずにはいられない程の美貌。

明らかに人の叡智を超えたその姿に僕はしばらく見とれていたが、遠くの方を見やっていた彼女がふと気怠げにこちらを向いた、次の瞬間。

「ひっ………!?!」

夢心地にあつた頭は急激に現実へと引き戻され、先ほど空間震の直前に感じたものと同質の、しかし比べものにならない強さの悪寒が僕の四肢を凍り付かせた。

目を見開いて硬直した僕とは対照的に、隣の土道さんは首をかしげている。あまり目が良くないのか、もしくは彼女の美貌に興味が無かったか、不思議そうな表情をするばかりだ。危険を察知している様子もない。

ドレスの少女はこちらを一瞥し、僕らの存在を確認すると手首の向きを変え、何かに手を伸ばす動作を開始した。その動きの先にあるのは、異形の玉座、その背もたれの頂点に見える柄のような棒。彼女の腕が真っ直ぐに伸び、柄を握ったところで僕は気づいた。気づいてしまった。

彼女が立つあれば、ただの玉座などでは決して無い。その真の在り方は、鞘なのだ。

少女は握った柄を真っ直ぐに引き抜き、玉座の中にあつた物の全貌を露わにした。

“それは剣であつた。

この世の者とは思えない可憐な容姿の少女が持つに相応しい、この上なく美しい剣。

どんな名匠がどれほどの時間と金銭をつぎ込もうと、絶対に真似出来ないと言言できてしまう、殺人的な魅力に溢れた逸品。

大人の身の丈ほどはあるだろう長大な幅広の刀身は、煌びやかな虹色の光に染められていて、少女の髪や瞳にある漆黒の輝きとは対極のイメージカラーでありながら、彼女の容姿を相乗効果でより一層際立たせていた。

息をのむ僕らに視線を送りながらも、少女がおもむろに剣を上段に構えた。その動きに合わせて刃から光の軌跡が生まれる。

その時、僕の感じていた悪寒が最高潮に達した。

「い……ッ!?!」

今一度土道さんを地面に押しさえつける。前よりもつと素早く。少

し勢いがありすぎたのか、彼の口からうめき声が漏れるが気にしている余裕など無いのだ。今度は僕も同時にうつ伏せになり、少女から感じる悪寒からなんとか回避を試みた。

結果的にそれは功を奏した。僕たちが頭を下げた刹那、頭上、すなわちさつきまで頭があつた位置を斬撃が通過していったのだ。

「……は——」

体を持ち上げた士道さんが驚愕で一杯といった顔で後ろを振り向く。きつとそこには、横一線に高さが揃えられた廃ビルや民家があることだろう。滅多に見られない景色であることは間違いない。僕も是非一度目に見てみたいが、つい今しがた咄嗟に動けたことさえ奇跡に等しい。現状の僕はまるで蛇に睨まれた蛙のように、遠隔斬撃という物理法則ガン無視の荒技をたやすくやってのけた少女から目が離せないでいた。

背後から雷鳴のような崩落の音が轟いてくる。切られた建造物の上側がバランスを失つたのだろう。その様子を見ていたからか、士道氏さんの顔面が完全に恐怖に支配されたものになった。

「じよ、冗談じゃねえ……っ！」

士道さんが尻餅をついたような体勢のまま、後ずさりをし始める。いけない。それは悪手だ。今尚こちらを凝視している彼女に動きを見せては!!

慌てて士道氏を止めようと首を後ろに振り、声を出す。

「だめです士道さんいまは……!!?!」

あ、しくじった。

「——お前達も……か」

目を、離してしまった。

例え反応出来ずとも、彼女から視線をそらすべきじゃなかった。

振り返った僕の目の前には、士道さんを見下ろすように立つドレスを身に纏った少女の後ろ姿が。

そんな。さつきまで相当遠くにいた筈なのに。いくつもの瓦礫が散乱している数十メートルを、音も立てず一瞬で移動したというのか。

僕がよそ見した際に。逃走を凶った土道さんの息の根を止められる至近距離まで。

「……………ッ」

動けない。

彼女は土道さんの方向を向いており、僕に大きな隙を晒していると。いうのに、肝心の僕の五体は竦んだままだ。

比較的自由に動く首を傾け、せめて現状把握に努めようと必死に少女の目の前にいる土道さんの方を確認する。

少女はこちらに背を向けているので彼女の表情は窺えなかったが、その向こうで腰を抜かしたままの土道さんの顔はなんとか見えた。

腕の一振りで人を殺せる存在に接近されているにも関わらず、さっきまで蒼白だった顔色は元に戻り、惚けた眼差しを彼女に送っていた。

「……、……、君は……」

たつぷり二呼吸分の絶句をして、ようやく喋った土道さんの第一声。それは、間近に見る彼女の美しさに当てられたのだと簡単に察せられる呆然自失としたもので。それに対する彼女の返答は、どこか悲しげな印象を持たせるものだった。

「……名、か」

極楽鳥のさえずりも、これには負けを認めるしかない美声。

なのに、その主である少女はすべてを諦めてしまった声音でこう言い放った。

「——そんなものは、ない」

そうして物憂げな雰囲気のままにカチャリと音をたてて虹色の大剣の柄を握り直し——って、おい。

「ちよつと待って頂けませんか？」

短時間とはいえ、しばらく彼女の視界から外れていたのが幸いした。この状況に慣れ、幾ばくか冷静さを取り戻せていた僕は、四肢はまだしも口は自由に動かせられるようになっており、すんでの所で少女に待ったをかけることに成功した。彼女はこちらへの敵意を消してはいない。僕らがまだ生きていられるのは偏に彼女が本気になっ

ていないからだ。どうやら名無しと判明した相手の少女は、少しは話の出来る人物のようである。ならば、平和的解決を目指すしかあるまい。それが弱者に許された唯一の抵抗法。人類の叡智の一つ、口頭弁論だ。ペンは剣よりも強し、なのである。まあ、僕ごときの弁論が彼女の持つ大剣に勝てるとは、小指の爪の先ほども思えはしないのだけれど。

「……なんだ？」

言い、彼女は緩慢な動作でこちらへ振り返る。

闇色の双眸が真っ直ぐに僕を捉え、またしても硬直しそうになるがギリギリで耐えた。

「ああ失礼、あなたには名が無いようですが、一応の礼節としてこちらは名乗っておきましょうか。僕は百目鬼智也と申します。さつきまであなたが話していたその彼は五河士道。僕らは通りすがりの者です。一つ質問があるのですが、よろしいでしょうか」

「質問だと……？何故そんなことをする必要がある」

「それは、あなたの目的が解らないからですよ。どうして僕らを攻撃なさるのです？」

「どうしても何も無い。どうせ、貴様らも私を殺そうとしているのだろう？お前達などに殺される私ではないが、効きもしない刃を振り回されるのも面倒だ。ならば、早めに殺しておくのは道理であろう。」

「……………」

想像の斜め上の回答である。

てつきり彼女は能動的にこちらを殲滅しにかかる侵略者なのかと思っていたのだが、どうやら真実は異なるらしい。攻撃されるのが嫌なので先に攻撃しておく。成程、子供にも解る単純明快な理論だ。こちらとしては、第一印象が視認するなり首を切断しにかかると言う劣悪なものだったので、その可能性は考えてなかった。しかし、これは好都合だ。彼女が温厚な性格かどうかはまだ推し量れないが、少なくとも理性的な会話は成立している。これなら、彼女を説得してお引き取り願うのも不可能では無いかもれない。

「…………つ、そんなわけ、ないだろ」

「士道さん……う？」

僕が彼女の誤解を解くべく次の展開を脳内で模索していると、士道さんがポツリと呟いた。

「——何？」

自らの考えを否定され三度振り返った少女の顔は、不信・驚愕・困惑と、様々な感情がない交ぜになった表情に歪められる。

そんな彼女を真っ直ぐ見据えて、士道さんは続けた。

「初めて会ったばかりの君を殺そうとするなんて……絶対に無い、そんなの間違ってる。……なんでそんな風に思うんだよ」

さつきまで恐怖に腰が抜けていた人間とは思えない、凜とした口調。

「お前は……何を——」

名無しの少女が士道さんの言葉を問い詰めるため口を開こうとした。だが、それを突然やめて、上を見上げた。

それにつられるように、僕ら二人も空を仰ぎ見て——
「啞然とした。」

「んな……ッ!？」

目蓋を限界まで開けて、息を詰まらせる士道さん。

「……………へあッ!？」

阿呆のような声をあげる僕。

確か、空間震警報が鳴った瞬間にも、似たような空を見た。

すがすがしい青空の中にカラスの群れが飛び立ち、不吉な黒い模様をなしていた。

今僕らの上空に広がる空も、その時と同じ黒い模様が散見される。

ただし、模様の主は空飛ぶ武装集団だが。

いや、少し修正しよう。

正確には、
「バーニアらしき巨大な機械を背負って飛行する、重厚な火器を持った数名の人間と、彼らの放った無数のミサイル」
が、空に模様を作り出している。

完全にSFである。さらば僕の常識。こんにちは死の運命。

……………んなアホな。

「わあああああああああああッ——!?!」

士道さんと共に声の限りに叫ぶ。もう完全に終わりだ。僕の青春は始まる前に散る。そう、思ったのだが——いつまで経っても、ミサイルの爆音は聞こえてこない。

「え……?」

気の抜けた声は、果たして僕のものか。もしくは士道さんが発したのか。

白煙を描きながら僕らの方向へ飛来していたミサイルは、空中数メートルで何かに抑えられているかのように静止したままになっていた。

「………無駄だと解らないのか、奴らは」

無感動にそう言った少女が、剣を握っていない左手をミサイル群にかざし、握りこむような動きをする。

途端に止まっていたすべてのミサイルが水圧に潰されるように形を変え、爆発を起こした。しかしその爆発も水風船レベルに規模が小さい。まるでミサイル本体も爆発も、外部から見えざる手で封じられたようだった。

先制攻撃が文字通り不発し、武装集団が狼狽えたように見えたが、ミサイルの嵐を止めはしない。むしろ、発射される数は増えるばかりだ。

「——やはり、そうだ。……やはり、やはり……っ」

絶大な力を見せつけた少女はか細い声でそう言うと、僅かに表情を変化させた。

その顔は、強者には不釣り合いな、助けを求める迷い子のそれに似ていて——

「——っ」

——それを目の当たりにした士道さんが、悲痛そうな彼女に胸を痛めるように眉間に皺を寄せた。

「……消えろ、消えろ消えろ消えろッ!人間!!」

士道さんは、彼女を殺そうとする人間は間違っていると切り切った。だが、彼らは。銃火器を間断なく撃ち続ける彼らは。

確実に、少女の命を奪おうとしている。

憎悪を、絶望を、悲しみを、その水晶のような瞳に宿した少女は、右手の剣を空へと向ける。その心にあるのだろう負の感情を刃に乗せて、攻撃を続ける敵目がけて袈裟懸けに振り下ろした。

瞬間、大気が轟轟と唸って彼女を中心に衝撃波が広がり、虹の大剣の切っ先からは見覚えのある斬撃が猛スピードで飛んでいった。

滞空していた集団は大慌てでそれを回避。次いでその場から離脱を始めた。だがその直後。ミサイルが飛んできていたのとは別の方向から光線が襲い来る。

その攻撃もミサイルと同じように空中で掻き消され少女には到達し得なかったが、光線が四散した際発生した閃光に僕と士道さんは思わず目を瞑ってしまふ。

何も見えない状況の中、近くで何者かが舞い降りるような足音が聞こえた。

目を開き、足音の方を見ると、そこには光で出来たナイフ型の武器を構え、ボディースーツや全身タイツを彷彿とさせる機械服を着た細身の少女が。

年の頃は十代中盤。僕らとそう変わらない。肩にかかるかどうかくらいのボブカットの髪に、人形のような端正な顔のつくり。そして――殺意に満ちた瞳の少女だ。

「鳶…………折紙…………？」

士道さんが機械服の少女を見てぼそりと呟く。すると、名無しの少女を鋭く見つめていた彼女が士道さんを一瞥し同じく呟いた。

「五河士道…………？」

どうやらこの二人は知り合いのようだ。しかし今はそんなことはどうでも良い。

「また…………お前か」

「へプリンセス」。あなたを殺す」

「…………やめろ。その目は、嫌いだ…………！」

互いに知り合いであるのは士道さんと機械服の少女だけではないらしい。遠慮の欠片も無い敵意の応酬が始まり、一触即発の空気が漂

いだす。

この立ち位置はまずい。とてもまずい。

「士道さん……逃げますよ」

両サイドの彼女らには聞こえない音量で士道さんに話しかける。

今僕と士道さんは二人の少女に挟まれる場所にいる。

それだけ聞けば羨ましがられるかもしれないが、片や人外の力を振るう天災の化身。片や一般人への流れ弾も厭わないアナーキスト軍団の一員。それも今にも殺し合いをしだしそうな雰囲気。もしこのまま戦いが始まれば……。

はつきり言って詰みである。

「可及的速やかにここから離れないと……」

「……待ってくれ……二人を止めないと……話が出来る相手と殺し合うなんてっ」

「気持ちにはわからなくも無いですが冷静に。…死にたいんですか？あなたにはまだ、琴里さんを救い出すという大切な用事があるでしょう」

「っ……」

士道さんが悔しげに唇を引き結ぶが、反論はしてこない。不承不承といった態度だが、了解はしてくれたようだ。

そうと決まれば長居は無用である。

額から滝のように脂汗をかきながらも、彼女たちの様子を見つつジリジリと少しずつ移動して――

その時。士道さんの制服のポケットから、軽快な電話の着信音が響き、静寂を破る。

「――！」

「――！」

それが、合図となった。

二人の少女が、衝突する。

「ぎゃあああああああ!!!」

ああ、もう。士道さんの馬鹿。

光のナイフと虹の大剣がぶつかり合って起きた暴力的な風圧に仲

良く同じ方向へ吹き飛ばされ、僕と士道さんは凹凸の激しいアスファルトの上をゴロゴロと転がっていく。

士道さんに八つ当たりに近い呪詛を送りながら、僕はしたたかに扉に頭を打ち付けて意識を手放した。

その頃、空の上のとある艦橋にて――

「状況はどう?」

「司令……ご機嫌麗しゅうふっ!!」

「挨拶は良いから説明をなさいこの下郎」

「はっ。精霊出現と同時に攻撃が開始されました。顕界したのは、ここ数日の傾向の通り〈プリンセス〉です」

「AST?」

「そのようです」

「ふん……たかだか現代の魔術師風情が、精霊に勝てるわけ無いのに」
「確認されているのは総勢十名。内一人が現在追撃、交戦中です」

「映像だして頂戴」

「はっ」

「……ふうん、中々やるじゃない。――でも、これじゃどうしようもないわね」

「確かにその通りですが、何も出来ていないのは我々も同じことかと」

「……………フツ」

「あふんっ!!」

「言われなくとも理解しているわ。それに、これからは見ているだけじゃないわよ」

「と、いうことは」

「ええ、ようやく円卓「ラウンズ」の爺共が許可を出したわ。――作戦開始よ」

「おお、ついにですか」

「……………神無月」

「はっ。どうぞ」

「……………フンツ」

「ぶべらっ!!」

「間抜け。イチゴ味は三日前に舐めたわ。同じ味を出すときは最低四日は置きなさい」

「失礼しました。ではこちらを」

「ソーダ味……………まあ良いでしょう。……………ああ、そう言えば、ウチの秘密兵器は？さつき電話にでなかったんだけど。」

「ああ、彼でしたらあちらに」

「……………全く。何暢気に気絶なんかしてんのかしら、あの愚兄。ちよ
うどいいわ、回収しなさい。」

「はっ……………。隣で同じく伸びている青年はいかがなさいますか」

「一般人の部外者でしょ。適当なシエルターに送つといてやりなさい」

「いえ……………それが、彼は先ほどプリンセス相手に堂々と問答をやつてのけまして。かなり優秀な人材かと」

「……………シツ」

「ぐおおう!!」

「そういうのは早く言いなさいよこのトウキョウトガリネズミ」

「世界最小のは乳類ですか……………良イッ!」

「その問答の音声流して」

「はっ」

『ちよつと待つて頂けませんか?』

『……………なんだ?』

『ああ失礼、あなたには名が無いようですが、一応の礼節としてこちらは名乗っておきましょうか。僕は百目鬼智也と申します。さつきまであなたが話していたその彼は五河士道。僕らは通りすがりの者です。一つ質問があるのですが、よろしいでしょうか』

『質問だと……………?何故そんなことをする必要がある』

『それは、あなたの目的が解らないからですよ。どうして僕らを攻撃なさるのです?』

『どうしても何も無い。どうせ、貴様らも私を殺そうとしているのだろう？お前達などに殺される私ではないが、効きもしない刃を振り回されるのも面倒だ。ならば、早めに殺しておくのは道理であろう。』

「……………へえ……………」

「百目鬼君はこの後、ASTとへプリンセスの両者に挟まれた際、士道君に素早く撤退指示を出しました。しかしタイミング悪く司令からの着信で士道君の携帯が鳴ってしまい、それを切っ掛けに始まった戦闘の衝撃波で士道君諸共気絶したようです」

「……………」

「あべしっ!!」

「私が悪いと言いたいのかしら？このアシナシイモリ。……………で？状況判断能力や弁論術が優れている程度じゃ理由として薄いわよ。一般人の記憶なんて顕現装置で幾らでも消せるのだし、精霊を目撃したことも関係ない。あなたがわざわざ引き込もうとするんだもの。理由、他にもあるのでしょうか？」

「流石は司令、お見通しですか。ええ……………。彼が精霊の攻撃や空間震に対して異常に敏感に感知・回避をしていたので、少し気になって調べてみたのですが…………。百目鬼君からごく微弱ではあるものの霊力が確認されました」

「……………なんですって」

「まだ遠距離からのスキャンだけなので具体的な数値は定かではありませんが、少なくとも一つ、先ほどの司令のお言葉に訂正を。彼は……………一般人などではありません」

「……………決まりね」

「では……………」

「ええ、彼も一緒に連れてきて」

「了解しました」

「さて……………。私たちのデートが始まるわよ。総員、準備はいいかしら？」

「司令。彼はもしや、我々の第二の切り札となるのでしょうか」

「さあね、私には解らないわ。それにしても、霊力を持った人間……ねえ。そいつほんとに人間なのかしら」

「経歴なども洗っておきますか？」

「頼むわ。後は……そいつが役立たずで無いことを祈るばかりね——」

痛い。痛い。痛い。

体が?.....違う。

心が?.....違う。

そんな、一部分じゃ無い。

もつと広いもの。

もつと大きいもの。

僕の全て。

魂が、痛い。

痛い。痛い。体も痛い。

痛い。痛い。心も痛い。

痛い。痛い。痛い。痛い。痛い——

「痛いっ!」

「.....む...?」

「智也!?起きたのか!」

僕が目を覚ますと、そこはベッドの上であった。

右側から聞こえてきた声の方へ顔を向けると、そこには隣のベッドで体を起こして座っている土道さんと、なにやらとてつもなく不健康そうな女性の二人が僕を見ていた。

「.....う.....(こ)は...」

二人から視線を外し、寝起きのせいかな、妙に冴えない頭のまま
で周囲を見る。

僕が寝ていたベッドは、簡易的なパイプ製のものだった。右隣には土道さんの居るベッドが並んで設置されており、左側は白いカーテンで仕切られている。一瞬高校の保健室かと思ったが、上の方を見てみると、むき出しの電気配線がいくつも見える。高校の保健室がこんな無骨な訳がない。なら、ここは一体どこなのだろう。

それを土道さんに尋ねようともう一度首を右に回す。息が掛かりそうなほど近く、僅か数センチの距離に、眠たげな女性の顔が。

「フアツ!？」

「…………ふむ、血色は良好だな」

「いえあの、貴女は……………」

「…………ん? ああ。…………私は村雨令音【むらさめれいね】だ。こここの解析官をやらせてもらっているよ」

解析官…………? そんな役職があるなんて、ここはどんな職場なのだろうか。気にならなくも無い。

けれど、そんなことより。

「成る程。では、村雨さんと。……………ところで村雨さん。」

「……………どうしたんだ?」

「僕の顔色の確認ができたなら、一旦離れて頂きたい」

「……………ああ、すまない」

短く謝罪し、村雨と名乗った女性が一步後ろに下がる。全体像が解るようになったので、改めて村雨さんを見た。

スーツとは違う、カーキ色の制服を着た女性だ。二十代の前半くらいの歳だろうか。少なくとも未成年では無いはずだ。

第一に目に付くのは、掛けている眼鏡の向こうにある黒々とした分厚い隈だ。明らかに不眠症か何かかと思えて取れる。その他、乱雑に結ばれたサイドテールや、大きく突き出している母性の象徴なども特徴的だが、何よりも、胸ポケットに何故か納まっている修繕の痕だらけの熊のぬいぐるみが、彼女の個性の中で最大のインパクトを誇っていた。

「智也ー」

ベッドから飛び降りるギシリという音が聞こえ、直後、村雨さんの左奥から土道さんが早足で僕のベッドに詰め寄ってきた。

「お前を案じていた」と顔に書いてあるような表情だ。きっと彼は嘘が下手なのだろう。思わず苦笑してしまうが、とにかく、僕は彼に心配をかけさせてしまったらしい。ならば一言謝罪するの

が筋と言うものだろう。しかし、同時に彼には聞きたいこともある。

「土道さん、お元気そうで何よりです。体は大丈夫そうですね」

「あ、ああ…俺は大丈夫だ…って、そうじゃねえ！お前は大丈夫なのか？どつか痛かったりは…」

「そうですねえ…今のところは体に問題はないですよ。土道さんは僕より先に目が覚めていたのですね。すみません、ご心配おかけしました」

「いや…謝らないでくれ。…俺が巻き込んだようなもんだし…」

「…………あのねえ、僕が付いてくって言ったんですよ？それにこうして生きてますし、そんなの言うだけ野暮でしょうが」

「…………そうだな」

すつかり意気消沈気味の土道さんである。意外と女々しいなこの人。

ここで土道さんに何か言っても、恐らく謝罪の無限ループになるだけだ。もつと建設的な話をしよう。そう思い、さつきから気になっていた質問を投げかける。

「時に、土道さん？」

「ん？どうした？」

「妹さんは、見つかったのですか？」

「…………いや、まだ俺もさつき気絶から目が覚めたばかりで…」

土道さんの顔に急激に陰が差し始めた。余程不安なのだろう。

それもそうだ。僕たちが空間震に遭った時、妹さんのGPS反応はファミレス前から動いていなかった。レストラン前に居た妹さんが、警報に驚いて携帯電話を落としてそのまま避難した…とかだったらいのだけど、あまり希望的観測ばかりもしてられない。

もしかしたら、最悪の展開になっている可能性も…

「…………ああ、それなら大丈夫だよ」

…………ん？

今まで黙って話を聞いていた村雨さんが、前触れなしに会話に入ってくる。

大丈夫……？妹さんの安否が？何故村雨さんがそれを答えられるのだろう。

「……そろそろ時間だな。……ちょうどいいから、君たちも付いてくるといい」

僕たちが村雨さんの言葉に反応する前に、彼女はベッドを囲んでいたカーテンを開け放ち、先へ行ってしまおう。随分とマイペースだ。

カーテンの外側は思っていたより広く、保健室よりは病室と言った方が適していた。ベッドの数は合計六つ。そこら中に医療器具も置かれていた。昔プレイした某神を喰うゲームの中に出てきた医務室を連想した。

先行していた村雨さんはフラフラとした覚束ない足取りで部屋の出口に向かっていく。今にも転んでしまいそうで見ていてハラハラする。が。そんなことを考えたのもつかの間、村雨さんが何も無いところで足をもつれさせ、壁に顔面を打ち付けた。

結構いい音がした。

「！だ、大丈夫ですか！」

「……むう」

驚いた土道さんが叫ぶと、バランスを崩したままの体勢で壁に寄りかかっていた村雨さんが低い声で唸る。

「……ああ、すまんね。最近少し寝不足なんだ」

少し寝不足だけの人間では顔面強打してノーマリアクションで居られないと思う。

「ど、どれくらい寝てないんですか」

土道さんの問いに、村雨さんはしばし間を置いてから指を三本立ててみせる。

「三日。そりや眠いですよ」

「……三十年、かな？」

「ケタが違えー！」

明らかに彼女の外見年齢を超えている件について。

不眠症なんてちやちな物どころでは無かった。どういう体してんの。

「……と。薬の時間だな、失礼」

村雨さん、懐を探して薬の瓶を取り出す。蓋を取って、口を開け、瓶を仰いで錠剤を一気飲み——

「つておいッ！」

士道さんが突っ込みを入れるも、時既に遅し。

バリバリガリガリと、堅めのスナック菓子をかみ砕くような音が聞こえ、そのまま尋常で無い量の錠剤が村雨さんの喉を通過する。

「……なんだね、騒々しい」

「いや何でそんな大量に飲むんすか！てか何の薬ですか!?!」

「……もつともな質問である。」

「……全部睡眠導入剤だが」

「それ死ぬッ！」

ほんとにどういう体してんのこの人。

「……今ひとつ効果が無いのだが、まあ、甘くておいしいからね」

「それ実はラムネじゃねえの!?!」

ラムネだとしても胃がもたれそうだ。

それにしても。

「士道さんってツツコミ体質だったんですねえ」

「今そこどうでもいいだろ!?!」

「……なんだ、こりやあ……」

「改めてさようなら、僕の常識」

村雨さんの案内で連れてこられたのは、ブリッジであった。

ブリッジと言っても橋ではない。波動のビームを撃つ宇宙戦艦や、白い悪魔を載せたホワイトなベースなどを思わせる、所謂艦橋である。もちろんそれらはアニメの中の、言わば空想上の物であって、実際にはそんなSFチックな艦橋は例え最新鋭のイージス艦にも存在しない筈なのだが、目の前のこの空間はどう見てもブリッジとしか言い様がない。

僕たちが入ってきたドアを頂点にして、部屋全体が大きな楕円形をしている。その楕円の外周部には、怪しい光を煌煌と放ついくつものモニターが並べられていて、それぞれの正面の席にクルーらしき人物達が座っている。そして、楕円の中心にある、緩やかな階段が両サイドから続いている高い台には、いかにも艦長席といった厳格な椅子が設けてあった。

ここに来るまでの廊下も、まるで潜水艦のような頑丈な材質だと土道さんと二人で言い合っていたが、流石にこれは度肝を抜かれた。

「……連れてきたよ」

村雨さんが、フラフラしたままそう言う。

「苦労様です」

艦長席の隣で直立不動の姿勢でいた長身の男性がこちらに振り返り、恭しく腰を折って礼をする。

村雨さんのそれとは色違いの、白い男子制服に身を包んでいる。背中まで伸ばされたウェーブのかかった長髪にキリッとした顔立ち。紳士的な態度も相まって眉目秀麗な青年というイメージを抱いた。

「初めまして。私はこの副司令官、神無月恭平「かなづき きょうへい」と申します。以後お見知り置きを」

「は、はあ……」

「これはこれはご丁寧に。僕は百目鬼智也と申します。どうやら気絶した僕たちを拾って頂いたようで、ありがとうございます」

「いいえ、礼には及びませんとも。それに私はあくまで副司令官。回収の指示を出したのは司令官ですので、感謝の言葉でしたらそちらに」
僕らとの挨拶を言い終えた彼は、艦長席へと声を掛ける。

「司令、村雨解析官が戻りました」

すると、こちらに背を向けていた艦長席が、低くモーター駆動の音を鳴らしながらゆっくりと回転しだした。

そして。

「——歓迎するわ。ようこそ、ヘラタトスクへ」

現れたのは、真紅の制服の上着を肩掛けにした小柄な少女。大きな

黒いリボンで髪をツインテールに結わえており、瑞々しい唇からは棒付き飴の棒部分が飛び出している。ワイシャツの胸ポケットには、かわいらしい猫の飾りが付いたピンク色のペンが刺さっていた。

廃墟の街に君臨していたドレスの少女や、殺意に溢れた機械服の少女も大概場に似合わない年齢だったが、司令と呼ばれたこの少女はそれよりさらに幼い。見た目からの憶測だが、まだ中学生くらいではなからうか。

「……………琴里？」

彼女を見た土道さんが、信じがたい物を目にしたように言う。

……………ん？琴里とな？

「……………土道さん、それはもしかや妹さんの名前では…？」

もしそうだとしたら……………。

「あなたの妹さんは秘密結社のボスでいらつしやるので？」

「い、いや……………そんなわけねえだろ」

「残念だけど、そっちの彼が言ってることの方が正解よ、土道。と言うか、この状況を見てまだそれに気がついてなかったなんて、船食い虫に穴を開けられた木材みたいにスカスカの頭なのかしら。一度蟻でも流し込んで型を取ってみても面白そうね」

「……………え？……………え？」

「まあ、正確にはボスじゃなくて司令官なのだけけどね。組織のトップなんて面倒すぎてやってられないわ」

顔を軽く上に向けてこちらを見下す目つきそのまま、随分な言葉を吐く琴里さん。かなりアバンギャルドな性格の妹さんだ。

「さてそれじゃあ、あなたたちの置かれた状況をこの私自ら説明してあげるわ」

琴里さんの発言の直後、遙か高くにある天井からつり下げられるように設置されていたスクリーンが光を発し始める。映し出されたのは、少し前に見たのとはほぼ同じ、廃墟の街に佇む少女と襲いかかる武装アナーキスト軍団の映像だった。

こつちを無視して勝手に話し始めたが、何にせよ解らないことだらけなので、説明してもらえるのはありがたい。素直に耳を傾ける

としよう。

「聞きたいことは山ほどあるでしょうけど、それを解説するためにはまず基本知識を得てもらわないと話にならないの。……この映像を見て頂戴。先日空間震が発生したときの物で、何人か人が立っているのが見えるでしょう？あなたたちがさつき見ていたのと似たような状況よ。で、これが精霊つて呼ばれてる怪物で、こっちがAST。陸自の対精霊部隊よ。厄介な物に巻き込まれてくれたわね。私たちが回収してなかったら、あなたたちとつくに死んでたわよ？で、次に行くけど——」

「ちよ、ちよつと待った!」

せつかくの説明を、士道さんが慌てて止めてしまった。何か言いたいことでもあるのだろうか。

「何？司令官直々の説明を遮るだなんて一体何様のつもりかしら。本来なら感極まって涙してもいい場面なのよ。今なら特別に靴を舐めさせてあげてもいいのだけど？」

何様かと言われればお兄様だと思う。

後別に士道さんもいくら妹が可愛くても靴は舐めないだろう。

「靴を……舐め?!?ほ……ッ、本当ですか!?!」

琴里さんの言葉に最も敏感に反応したのは神無月さんだった。喜び勇む彼に琴里さんは「あんたじゃない」と冷徹に返し、肘鉄を打ち込む。

「ぎやおおっ……!」

鳩尾にクリーンヒットしたのだが、喜色満面の表情をする神無月さん。どうやらアツチ側の人のようだ。

……女王気質の中学生が司令官で、ドマゾの残念イケメンが副司令。……大丈夫かこの艦。

「……」、琴里……だよな？無事だったのか？」

「あら、妹の顔を忘れたの？士道。物覚えが悪いのは知っていたけど、まさか健忘症レベルとはね。それとも早めのボケかしら。老人ホームの予約を取っておきましょうか？」

「……」、なんかもう、意味がわからなすぎて頭の中がワニワニ

パニックだ……」

なにその船食い虫など比較にならない愉快的脳内。

余程混乱しているのか、面白おかしい言い回しをしながら後頭部をかいている土道お兄様。

そのまま困ったように声を発した。

「ええと、お前、何してんだ？ていうかここ、どこだ？お前ファミレスのところ居たんじゃなかったのかよ。俺たちはお前を迎えに行くために外に出てたのに——」

「あーハイハイ、落ち着きなさい。まずはこっちから理解してもらわないと、説明のしようがないのよ」

“こつち”という言葉に合わせて琴里さんがスクリーンを指さす。

「けどまあ、あんまり説明の最中にネズミみたいに五月蠅く喚かれても邪魔になるわね。しかたないわ、不本意だけど先にそつちから種明かししましょうか。——一回フィルター切って」

琴里さんの言葉で、薄暗かったブリッジが真昼の明るさを得た。とはいえ、部屋の照明が付いた訳ではなく——ブリッジの周辺に青空が広がったからだった。

「……………。こりやあ……………」

「……………へー。すごいですね、これ」

「どう？綺麗でしょう？外の景色がそのまま見えているのよ、これ」

「外の景色って、じゃあここは……………」

「ええ、その通りよ。ここは天宮市の上空一万五千メートル。——じゃあ、改めて言つときましようか。ようこそ“空中艦”へフラクシナスへ。……………ふふっ、驚いたかしら？」

「ああ、流石に信じられねえや……………」

「僕もびつくりですねえ。これはいよいよもって常識を捨てなくては」

「そうでしょうそうですね……………。でも土道、さつきファミレスがどうとか言ってた？」

「だってそりやお前、これ……………」

「……ああ、それで警報中に外をほつつき歩いてたのね。この艦は今ちようど待ち合わせのファミレスの真上に居るのよ」

士道さんがポケットから携帯電話を取り出し、琴里さんの携帯の位置情報を見せる。それに琴里さんは納得したようで何度か頷き、次いで大きくため息をついた。

「……全く。私がそこまでこのアホ兄に馬鹿だと思われていたなんて、心外だわ。——しかし、まさかGPSを使われるなんて、流石に盲点だったわね。後で不可視化「インビジブル」と自動回避「アヴオイド」だけじゃなくて、隠蔽「コンシルメント」もかけとかないと」

琴里さんが顎に手を当てて何か言っている。対策を練っているのだろうか。それはいいのだけど、僕は早く解説の続きをしてもらいたい。

「あのー、すいませんが、そろそろ状況説明の再開をですぬ……」

「あ、そうだったわね。あんまり士道がやかましいから、つい脱線しすぎちゃったわ」

「む……悪かったな……。だけど、空中艦……余計にこんがらがってきた……。確か……精霊……とか言ったか？」

「そ。彼女は本来この世界には存在しない物であり、この世界に出現するだけで、己の意思とは関係なく破壊をバラ撒く天災的怪物。どこからともなく街に現れては、辺り一帯を吹き飛ばしちやう世界を殺す災厄なの」

琴里さんが両手を勢いよく広げる。爆発の衝撃を表現しているようだ。

「……世界に出現。……天災。……爆発。……まさか、そういうことか。」

「ここまでお膳立てされればいくら何でも察しが付く。」

「……悪い、ちよつと壮大すぎてよくわかんね」

「……空間震とは、精霊がこの世界にやってくる時に、その転移の余波で起こる一種の衝撃波……つまりはそういうことですよ、士道さん。……で、正解ですよね？」

僕の確認に、琴里さんは愉快そうに笑みを浮かべる。

クレーターの中心で、破壊され尽くした街を眺めていたあの名無しの少女。彼女が「ただ」この世界にやってくるだけなら、どうやら陸上自衛隊の所属らしいアナーキスト軍団もあそこまで殺意むき出しに攻撃したりはしないはずだ。

確かに名無しの少女は恐ろしい力を持っていたが、会話が成立しない獣ではなかった。多くの人間が集まる自衛隊のような組織なら、中には会話による懐柔を望む穏健派もいて当然なのである。

なのに、アナーキスト軍団は大手を振るって兵器を乱射していた。まるで、穏健派など最初からおらず、組織は満場一致で彼女を殺そうとしていると言わんばかりに。それはつまり、会話だなんて悠長なことを言っていられない被害が、精霊の——名無しの少女の影響で出ているという証左だ。

空間の地震。空間震。

神の裁きとまで噂された正体不明の大災害は、その実、異世界からの来訪者の気まぐれで起こされるものだったのだ。

「——な」

「ま……規模はまちまちだけどね。小さければ半径数メートル。大きければ——それこそ、大陸に大穴が開くわね」

大陸に開いた大穴。三十年前の最初に起きた空間震、ユーラシア大空災のことだろう。

死傷者はおよそ一億五千万人。生存が絶望的な行方不明者も入れれば、文字通り数え切れない被害を生んだ、人類史最大級の災害。「運が良かったわね。もし今回の空間震の規模がもっと大きかったら、二人とも消し飛んでいたかもしれないわよ」

その言葉に、忘れていた恐怖が蘇る。空間震の直前と名無しの少女の攻撃……計二回にわたって感じた、言葉では言い尽くせぬ悪寒。

震えそうになるのを理性で抑え、話を続ける琴里さんを見る。「それと、次の説明はこっちな。A.S.T.既に一度言ったけど、陸自が所有する対精霊専門部隊よ」

琴里さんはスクリーンの中の人影の内、人工的な兵器で武装し

た集団を示した。

今度の説明はあのアナーキスト軍団についてのようだ。

「……精霊専門の部隊って——具体的には何してるんだよ」

「簡単よ。土道も見たでしょう？あいつらが精霊に向かって必死に攻撃してるトコ」

「撃退、ないしは殺害……ってことでしょか」

「……………ツ！殺すってのか……………!？」

「ええ」

何でもないことのように肯定する琴里さん。だが、土道さんの表情はとても苦しそうだった。

精霊と呼ばれる、名無しの少女が言っていたことを思い出す。

お前たちも、私を殺しに来たんだろう？と、そう決めつけていた。事実、アナーキスト軍団は殺意と敵意を以て精霊と相対していた。精霊に殺意を向けなかったのは、僕らのような事情を知らぬ一般人のみ。その一般人の多くも、精霊が空間震の元凶と解れば彼女を世界から淘汰しようとする事だろう。

それが、人として正常な反応だ。死の危険性を排除しようとするのは、生きとし生けるものの当たり前前感情だ。

——だと言うのに、土道さんは納得できないようだ。

「まあ、普通に考えれば死んでくれるのが一番でしょうね」

なんの感慨もない、冷めた声音。

「な、なん……………っ、でだよ」

「なんで、っですって？」

土道さんが苦悩の中でひり出した言葉を、琴里さんは興味深そうに反芻した。

「何もおかしいことはないんじゃない？精霊なんて呼ばれちゃいるけど、とどのつまりは怪物。世界を蝕む最悪の毒素なのよ」

「だって、空間震は本人の意思とは無関係だって、お前言ってたじゃないか。——だったら」

「随意か不随意かなんて大した問題じゃないのよ。重要なのは、空間震の原因が精霊にあるっていうことだけ。…………土道達がみたあの空

間震だつてまだ小規模な方よ。いつまたユーラシアクラスのものが起きるか解らないんだから。士道の言い分もわからなくはないけれど、精霊の危険度は世界レベルなんだから、可哀想だなんて思つていられないの」

「ッ……。それでも、他に方法はないのかつて話だよ……」

自分のことを殺そうとしてきた相手を、士道さんは底い続けている。そんな彼を見て、琴里さんはほんの少し口角を上げていた。表情を隠そうとするも、湧き出てくる笑いが耐えられない……。そんな顔だ。

さつき彼女はこう言った。『普通なら』死んでもらうのが一番、と。ASTへの皮肉のように。

「……士道さん、何故そこまで精霊の肩を持つんです?」

「なっ……。!?お前ッ!」

「どうどう。……。ただ質問しているだけです、別に殺すことが正しいだなんて思つちやいませんよ。僕から見ても琴里さんの言葉は正論です。納得せざるを得ない。なのに士道さんが随分と食い下がる物ですから、ちよつとばかり理由が気になりました。……。ひよつとして、惚れでもしました?」

「っ、違えよ……。ただ、見ちまったんだ。お前だつて見てた筈だ。あの子が——泣きそうな顔をしてんのを。……。好き好んで世界をぶつ壊す奴は、絶対にあんな顔、しねえんだよ……」

「泣きそうな顔……。ですか。確かに僕も見ましたよ、ええ。……。……とところで士道さん、ヘフラクシナスって結局、何を目的とする場所なんですかね。」

「え……」

「この艦、すごい立派ですよ。琴里さんの言葉からして、どうやら透明になったりもできるみたいですし」

「……まあ、そうだな」

「精霊は殺してしまうのがベスト……。だなんて言うなら、この艦を戦場に投入すればいいと思いませんか?でも僕たちはさつきの街中ではAST以外の武装勢力は見えていません。」

「あら、ASTが私たちの同僚って可能性はないかしら？このヘフラクシナスも、自衛隊お抱えの艦かもしれないじゃない」

「確かにその線もありえますね。……ですが琴里さん。あなた先ほどから一般論しか言ってますよねえ？あたかも、自分たちの考えとはちがうけれど」という前置きを述べてあるかのように」

そうでなければ、あんなシニカルな言い方はしない。それに、琴里さんは士道さんの思考を誘導しているようにも見えた。精霊は殺すべき、精霊は人類の敵、との主張を淡々と続けることで、士道さんがその考えに反感を持つように。もし本当に思考誘導をしていたなら、話の流れの大部分を占めていた理論は、最後に否定される。その方が聞き手に衝撃を与えられるからだ。

「……！そうなのか！琴里！」

「……ほんと鋭いわね。気に入ったわ、あなた」

「……褒め言葉と受け取っておきますよ」

「それで、どうなんだよ！答えてくれっ琴里！」

「ああーもう、ちよつとは落ち着きなさい！真夏のアブラゼミの方がまだ静かよ！」

「士道さん、ステイ」

「犬か俺はッ!？」

「……で、実際どうなんですか？これで僕の早とちりだったりしたら、かなり恥ずかしいんですけど」

「大丈夫よ、概ね事実だから。そっちの想像通りこのヘフラクシナス、ひいてはヘフラクシナスが所属する母体であるヘラタトスク機関は、精霊を会話の力で無力化するために作られたの」

琴里さんは半ば諦めた様子で頷きながら答えてくれた。そして、続けて思わぬ言葉を言い放つ。

「殺すのは嫌なんでしょう？話し合いで解決したいのではありません？だったら士道——精霊と、デートしなさい。サポートはしてあげるから」

……………そう来ますか。

「ああー、まあ、うん。一理はありますよね」

「……………は、はあッ!？」

「解らない？精霊に恋をさせて、世界を壊すのを止めてもらうのよ」

「い、いやいや。何でそうなるっ!？」

「だーかーらー、精霊に破壊を止めてもらおうとするなら、説得が必要不可欠でしょ？」

「ふむ、そうですね」

「ああ、そうだな」

「それにはまず、精霊に世界の美しさを理解させるの。世界がこんなにすばらしいんだって思ってくれば、精霊だって壊したくなくなるでしょ」

「確かにそうですね」

「納得だ」

「で、よく言うじゃないの、恋をすると世界が美しく見えるって」

「いや、そのりくつはおかしい」

「成る程ツ!!」

「おいっ!？」

土道さんからツツコミを入れられる。何がおかしいというのだ。けど、この人のツツコミは基本スルーでいいだろう。ツツコミ体質であると同時に、弄られキャラでもあるようだし。

「さて、それはそれとしてですね……」

「待てやコラ」

「何かしら？あなたたちの疑問は粗方片付いたと思うけど」

「なぜに土道さんがデートするのでしよう。これだけ大きな組織なら、土道さんよりも適した人材がいると思うのですが」

「言われてみればそうだな……。なんでこんだけでっかい組織が、俺なんかのサポートするって話になるんだよ」

問題はそこである。中学生らしき琴里さんがこんなところで司令やってるからには、その兄である土道さんにもなにか才能とか能力とかがあるのだろうか。

「んー。まあ、土道は特別なのよ」

あ、さてはこいつ答える気ねえな。

「そんな説明があるかツ!!」

「つていうより、前提条件が逆なのよね。私たちの組織の目的のために士道がデートするんじゃないやなくて、士道が精霊とデートできるようにするために〈ラタトスク機関〉があるんだし。士道がいなくちゃこの〈フラクシナス〉もなかったわね」

「——はああつ!?!」

「そいつはすごい話ですね……。なんでまた」

「士道が特別だから」

「アツ、ハイ」

「……………これはもう、疑いようがないな。」

「おいいいいい!?!」

「いいから、文句言わない!機関の成り立ちがどうであれ、士道が自分で話し合いで解決したいって言ったんだから、きつちりその責任はとりなさい!なにも、〈ラタトスク機関〉の考え方に全面的に賛同しろなんて言いやしないわ。でも……………士道には他に方法なんてないんじゃないの?」

「ぐむむ……………」

「納得できなくても理解できたなら回答はYESと見なすわ。ここ最近の周期からして、次に精霊が来るのはだいたい一週間後よ。時間がないの」

「……………ツ。わかったよ……………」

拜啓、天国の母上へ。

「——よろしい。なら、明日から早速訓練開始よ!!」

僕はずつと、物語の主人公に憧れておりましたが、

「は……………うくんれん……………?」

僕の巻き込まれた物語は、どうやら、

「ええそうよ。訓練をするわ。女の子の扱いに慣れてもらわなくちゃ」

ボーイミーツガールだったようです。

四月十一日。火曜日。

朝八時過ぎ。

朝日の差し込む二年四組の教室。

この部屋にいる全員の視線が、僕に集中している。

「本日はー、皆さんにサプライズがありまーすっ！」

針のむしろと言うのは、こういった状況のことを指すのだろう。

「なんとなんと、新しいクラスメイトのご紹介でーすー！」

実にいたたまれない。できることなら逃げ出したい。

「『飛び級』で入学してきた、百目鬼智也君でーす！みんな、仲良くしてあげてねー！」

ああもう。

「百目鬼智也です。よろしくお願いいたします」

どうしてこうなった。

話は、一日前に遡る。

連れてこられたへフラクシナスの艦橋にて。精霊やASTのなんたるかや、土道さんがデートをすることなど、大部分の説明を終えた琴里さんが次なる話題にあげたのは、僕自身についてのことだった。「そう言えば智也、あんたって一年生なのよね。こっちで色々調べさせてもらったわよ」

「……まあ、見られて困る経歴じゃないのでとやかくは言いませんけど、あなたね……」

「お、おい琴里。それって個人情報勝手に探ったってことじゃー！って、智也お前俺より年下だったのか！」

「と、おっしやると言うことは、土道さんは僕の先輩なのですか」

「俺は今年から二年生だ——お前の方がしっかりしてるっばいけどな

……」

「いや別に気にしなくても——」

「全くね。智也の方は落ち着いて話を聞いてたのに、士道はずっとギャーギャー言ってる……。妹としてこの上ない恥さらしだわ。受精卵から人生やり直したらどうかしら」

「うぐっ……」

「ウグですって？ククト軍かしら」

ウグ……かなりマニアックなロボだ。琴里さんは世代ではないと思うのだが……士道さんの英才教育だろうか。

「琴里さん……その辺りで……それで？僕が一年生なのがどうかしました？」

「ああ、それなんだけどね。智也、あんた飛び級で二年生になりなさい」

何をのたまっているのだろうこのロリッ子は。

「……ええええ」

「露骨に嫌そうな顔をしないで。これは命令よ」

「命令ってあなた。僕は別にあなたの部下では——まさか。え？そのために僕をここに？」

「ん？どうした智也」

「ええつとですね、つまりお宅の妹さんはサスペンスドラマなんかでよく見る『この話を聞き直したからにはタダで帰す訳にやいかねえなあ』というアレをしてるんです」

「ふふん、その通りよ。おかしいと思わなかったのかしら？私の兄である士道はともかく、あなたは完全な部外者。あんな国家機密みたいな話を無償でしてあげる筈がないじゃないの」

「くっ……なんと汚いまねを……」

「ああ……。俺の可愛い妹がいつの間にか真っ黒に……」

「まあ別に？命令が嫌って言うのなら、正式にスカウトしてあげてもいいのよ？」

「？……スカウト、ですか？」

「ええ。あなた、精霊の攻撃に対する危機感知能力が高いみたいじゃ

ない。さつきから話していても思ったけど、かなり鋭い性格みたいだし。そういう人間がちょうど欲しかったのよ」

「…ああ、確かに。智也がいなかったら、俺きつとあの子の剣に切られてただらうし……」

「こんな調子だから、精霊を相手取るのにその愚兄一人じゃ不安なのよね。もちろんへフラクシナスがサポートに回るとはいえ、私たちにできるのは基本的に上空からのオペレーションだけ。デートになれば嫌が応にも土道一人になるとはいえ、そこに至るまで現地でサポートできる奴が必要になるわ。だから、常に土道とツーマンセルで行動させる為に、智也には土道のクラスに入ってもらいたい」

「ちよつと待て琴里。それ智也がいなかったら——」

「当然、最初から最後まで土道の単独任務になるわね。それ以外ないでしょ？」

「……………」

年上の男子高校生が、助けを求める瞳でこちらを見つめている。

微塵も嬉しくねえ。

しかし、もしここで「ハイ、さようなら」なんて言おうものなら、口封じの為に「OK、殺すわ」と言われるのだろう。社会から抹消されるのは嫌だが、僕は別に土道さんのように精霊を気に掛けている訳ではない。わざわざ行きたくもない精霊の目の前に行って、何度も死に目に会うのも御免だ。どっちを選んだところで僕には旨みがないのだが——

「もちろん報酬は出すわよ」

!?

「そうねえ……。結構危険なこともあるし——これでどう？」

人差し指を立ててみせる琴里さん。

「……………桁は」

「七」

「!!」

命がけの職場の給料としては少ないが……僕には十分すぎる額だ。生活費や学費を払っても九割以上残る。

「商談成立——ね」

「ええ、未永くお願いしますよ——司令官殿」

「ふふふ……」

「くくく……」

「……………オイオイ」

自業自得だった。

しょうがないね、お金は大事だからね。

「ええとー、席を詰めれば後ろ側が一席分開きますね。百目鬼君は視力はいいですか？」

「ええ、両目とも良好です。後部席でも大丈夫ですよ」

「それなら良かったです。じゃあ、最後列の真ん中、土道君の後ろに座ってくださいね」

「了解です」

担任の小柄で未成年にしか見えない若々しい女性教師（社会担当の岡峰珠恵「おかみね たまえ」教諭。通称タマちゃん。二十九歳の独身。情報源は土道さんだ）に席を指定される。

土道さんの後ろの席。なんともおあつらえ向きである。まさかこんなところまでへラタトスクゝが手を回しているのだろうか。……………可能性は決して否定できなかった。

数十人の視線に晒されながら教室の中を歩いて行く。土道さんの隣を通ってその後ろに——

「……………」

土道さんの真横を通りかかったところで、一際強い視線を感じ、そちらを見る。人形のような無表情の女子生徒と目が合った。

「……………」

何か用だろうか……………って、

「あ、トップアナーキスト」

「？」

A S T、もとい武装アナーキスト軍団の中で唯一精霊に猛追を仕掛けた少女が、土道さんの隣の席に座っていた。確か名前は、鳶一折紙「とびいちおりがみ」と言っていたか。

成る程、土道さんと知り合いであるのは解っていたが、席が隣同士であつたなら納得だ。………ん？これまずくないか？

「百目鬼くーん？どうしましたかー？」

「おっと、すみません。すぐに席に着きます」

岡峰先生の声で我に返り、急いで席に向かった。

「タマちゃんタマちゃん、飛び級つてことはこの子年下？頭良いの？」

「ねね、君つてどこから来たの？」

「どうめきつて名字珍しいねー。どうやって書くの？」

少し遅れて、教室内がざわつき始めた。無理もない。質問攻めに遭うのは転校生の宿命だ。実際に自分がその立場になるのは初めてだが。

「皆さん静かにしてくださいー！ホームルーム始めますよー！」

岡峰先生が必死に注意するも、中々喧噪は治まらない。恐らくこの日は、質問を捌いて終わることだろう。

「来て」

「へ？」

放課後。特にしつこく質問をしてきた、アイ・マイ・ミイとか言う名前の三人の女子生徒をなんとか納得させて、これから帰路につこうと席を立った瞬間のことだ。土道さんがアナーキスト——違った、鳶一さんに腕を掴まれた。

精霊を目撃した一般人である土道さんに、A S T所属の鳶一さんがやることと言えば、最早口封じ以外あり得ない。であれば、至極当然

「あなたも」

「……………」

——僕の方にも来るだろう。

何をされるかは解らないが、覚悟は決めておくべきか。

周囲から、朝に体験したそれとはまた違う、奇異なものを見る視線を向けられながら教室を後にする。

士道さんの手を引いて歩く鳶一さんは、一切口を開かぬまま姿勢良く歩き続ける。廊下を渡り、階段を上り、施錠されている屋上へのドアの前でようやく足を止めた。士道さんの腕は離さぬままに、顔だけをこちらに向けて、言う。

「あなたは下で待っていて」

「……士道さんと一緒ではいけないので？」

「駄目」

「………わかりました」

「智也……」

「……士道さん、ご武運を」

短く言ってからゆっくりと階段を降りていく。時間を掛けて踊り場に到着し、壁に背を預けた。

士道さんは今頃どんな脅され方をしているのだろう。この後同じ目に遭うのがわかっているので可能であれば知っておきたいのだが、上の階の音は周りの生徒の話し声に紛れてしまつて聞こえてこない。はあ、とため息を一つ吐き、今後の行動を考える。とりあえずはAS T隊員に連行されたというこの現状を、我が雇い主である琴里司令官に連絡をせねば。そう思つて携帯をポケットから取り出し、気づく。琴里さんの番号を知らなかった。

完全に手持ちぶさただ。さて、どうしたものか。

「……ん？あの姿は……」

やることなくなつてしまひ辺りを適当に見回していると、左側から見覚えのある眠たげな女性が。雑なサイドテール、巨大な隈、眼鏡、そして、胸ポケットにあるボロボロな熊のぬいぐるみ。ヘフラクシナスで出会つた時と異なり白衣を着ているが、あれは間違いなく村雨さんである。

何故解析官である彼女が来禅高校に居るかはまるで解らないが、こ

れは好都合だ。村雨さんから琴里さんに連絡をとってもらおう。

「村雨さ——んんんん!」

僕が声を掛けようとした刹那。ボタン!と派手な音を立て、村雨さんが廊下に倒れる。まるで唐突に意識を失ったような転倒の仕方だ。咄嗟に彼女に駆け寄り容態を確認しようとして——思い出す。

そう言えば村雨さんは極度の不眠症だった。以前もヘフラクシナスの医務室で余りの眠気から同じように転倒したのを見たことがある。

「——村雨さん、大丈夫ですか?」

「……ああ。ただ転んでしまっただけだ。……む?君は——」

村雨さんがのろのろと起き上がる。

「どこか怪我は?」

「……心配いらないよ。慣れているからね」

「……ちよつとすいませんね」

受け身も取らずに転ぶのを慣れてしまっただけかと思う。

自己申告では少々信用ならない。念のため前髪を掻き上げ、額を確認する。

「……ほんとにたんこぶ一つ無いんですね……」

「……気は済んだかい?」

「ああ、失礼しました。……それで、村雨さんはどうして学校に?」

「……この白衣でわからないか? 教員としてここに世話になることで、君たちの支援をすることになったんだ。担当科目は物理。二年四組の副担任もやらせてもらうよ」

「おお!それはありがたいですねえ。あ、立てますか?」

言いながら、村雨さんに右手を差し伸べる。

「……ああ、悪いね」

「どういたしました。……それでですね村雨さん、一つお願いが——」

「おーい智也、何かあったのか?」

その時、土道さんがこちらに声をかけながら階段を早足気味に降りてきた。

「——あれ、土道さん? 随分早かったですね、もつと時間がかかるか

と思っていたのですが……」

「ああ……そうだな……。それより、何か叫んでいたみたいだけど」
「……?」

彼の返事にあつた妙な間に首をかしげつつも、隣の村雨さんに視線を向けることで質問への回答とする。

「あれ、ええつと……村雨解析官?」

「……礼音で構わんよ。信頼関係を築かなくてはならないからね」

「ああ——じゃあ礼音さん……なんでここに?」

士道さんがさっきの僕と同じ質問をする。ま、村雨さんが教師になつたなんて見ただけではわかるはずもない。

村雨さんが同じ説明を士道さんに行っているところを眺めていると、不意に肩を軽く叩かれる。

振り返つてみると、能面のような眼差しで僕を見る鳶一さんがいた。どうやら士道さんの後から彼女も階段を降りてきたようだ。

「……………」

「あの……何か?」

黙つていては埒が明かないので、こちらから訊いてみる。

「あなたも、あのときあそこに居た?」

「あそこ」というのは精霊との戦闘の現場のことだろう。

目撃されている以上はしらばっくれなくても意味が無い。こつちが事情を把握していることは隠しつつ、正直に答えよう。

「ええ、確かに居ましたが……」

「そう……気が付かなかった」

……………。

「……………え?」

「士道しか見えていなかった」

「……………えええ」

なんだこの人。士道さんにご執心なのか? 僕は士道さんのすぐ近くにいたのに、全く気づいてなかったとか……。

「え、じゃあ何で僕を呼んだんです?」

「後から上司に映像を見せられて気づいた。一応口止めの為。……け

ど、それも必要性が薄い」

「それは……何故」

「……あなたの経歴は調べた。両親がいない以外普通の高校生。あなたがああとき見た物を世間に広めようとしたところで大した問題にはならない。だから、一度注意するだけにする。」

「……そりやどうも」

「あなたが見た少女は国家機密。口外すれば暗殺される……肝に銘じておいて」

「……了解です。お手数おかけしました」

言いたいことは本当にそれだけだったのだろう。自己紹介すらすること無く、鳶一さんは歩き去って行った。同様に、もう琴里さんに連絡を取ろうとする必要もなくなった。

……だが、彼女の発言の内に気になる点がある。自分でこういうのは何だが、僕は普通の高校生ではない。〈ラタトスク機関〉の手回しによって、成績がずば抜けている訳でもないのに飛び級を果たしているのだ。入試の時のデータがあれば、普通に考えれば矛盾に気づくと思うのだけれど。……ま、その辺りのデータも〈ラタトスク機関〉が弄ってくれたということだろう。畜生、ハードル上げやがって。

「……さてシン、早速だが」

「スルーした上に変な愛称つけた!？」

……いつの間にか土道さんと村雨さんが漫才を始めている。

「……なにやってんです?」

「……ああ、君も——ええと」

「百目鬼智也です」

「……そうか。では智也、君も一緒に来てくれ」

「ニツクネーム俺だけ!？」

「目的地はどこでしょう?」

「……物理準備室だ。君たちの訓練の準備が整った」

色々と悟ったのか、深くため息をしてから土道さんが尋ねる。

「はああ……。で?訓練するのは一体何するんですか?」

「……うむ。琴里から聞いたが、シンは男女交際の経験が皆無だそう

だね」

「琴里エ……」

「……別に責めてはいないから、そう気にするな。ただ、これから精霊を口説くとなると、身持ちが堅いままではいられなくてね」

「ああ、昨日琴里さんも言っていましたね。女の子の扱いに慣れてもらうとかなんとか」

「……そうだ。だからこれから——」

「おにーちやああああん！」

村雨さんの声を遮って、廊下の奥の方から大音量で少女の声が聞こえてくる。

その方向を見ると、記憶に新しいツイントールが凄まじいスピードでこちらに突進してきていた。

「はがあ……っ！」

その速度のまま、土道さんの腹部に猛烈なチャージアタックをかます。

……普通に痛そうだ。

「あははは、はがーだつて！ 市長さんだ！ あはははは！」

娘を攫われそうな筋肉市長を知っているとは驚きである。

それにしてもこの少女。見た目は琴里さんにそっくり……：……とか本人そのものだが、言動が真反対だ。双子なのだろうか。よく見るとリボンの色が昨日見た黒ではなく、清楚な白であることが確認できた。

「元気な女の子ですねえ。琴里さんの双子の妹さんですか？」

「……いや……」

僕がそう言うと、その場にいた全員に大変微妙な表情をされた。訳がわからない。

頭の上にクエスチョンマークを浮かべていると、琴里さんの妹さんが走ってきた方からタマちゃん先生がトテトテと歩いてやってきた。

「琴里ちゃん、廊下は走っちゃダメですよ」

「はーい、ごめんなさーい」

……なぬ!?

「あ、五河君。妹さんが来てたので、今校内放送で呼ぼうとしたところだったんですよ」

「は、はあ」

「おー、先生、ありがとねー」

「はあい、どういたしまして。…もうつ、可愛い妹ちゃんですね!」

「ええ……まあ」

にこやかに手を振りながら、タマちゃん先生は元来た方へ戻っている。

開いた口が塞がらないとはこのことか。

タマちゃん先生は確かに少女を「琴里ちゃん」と呼んでいた。士道さんも、少女も、それを否定しなかった。

「あはは、ちよーつとビックリさせちゃったかな?」

「………琴里さん………なのですか?」

「うん!そだよー。今は妹モードなのだ!」

「妹………モード………」

「……まあ、こうなるよな。普通だったら」

「別に二重人格とか、そゆんじゃないからねー。ほらっ、人には二面性があるって言うじゃん!」

「いや、そんな説明じゃ流石に……」

「そっすかー」

「軽っ!?!」

「軽いだなんて、そんなことありませんよ。いやはや全く、驚天動地の如くです。まさかあれだけ女王様気質だった琴里さんが、こんなに無邪気な一面を併せ持つていらっしやるとは。——うん、とても良いと思います。流石は司令官殿です」

「あはははー、褒めてもらえるのは嬉しいけど、妹モードの時に司令官呼びは恥ずかしいなー」

どんぐりのようなコロコロと丸い瞳、鈴を転がすような声、元気という言葉が人の姿を得たかのような仕草。そして『おにーちゃん』呼び。

全国百万人の妹萌えが、血涙を流すこと間違いなしのパーフェクト妹だ。

「実に可愛らしいです。士道さんが心底羨ましいですよ……………ええ、本当に……………」

「智也……………なんか怖いぞ……………」

「はっはっは……………気のせいでは……………」

「……………さて、そろそろ移動したいのだが」

おっといけない。余りの嫉妬心に予定を忘れてしまっていた。

村雨さんの言葉を皮切りに、全員思い出したように歩き出す。

大股で先頭を行く琴里さんについて行くと、程なくして『物理準備室』のプレートが上部に見える扉に到着した。どうやらこのようだ。ガラガラと引き戸をスライドさせ、室内に足を踏み入れる。

その部屋の中にあつたのは、大量のディスプレイにコンピュータ。物理準備室と言えば普通、振り子や固定用クランチといった実験器具のほかにも各種参考資料などが保管されている場所だが、ここにはその手の物が一切見当たらない。これもヘラタトスク機関の差し金だろう。

「なんですか……………」

「……………備品を保管する部屋？」

「おいコラ疑問符ついてんぞ」

士道さんと村雨さんがまたしても漫才しだした。

スルースキルの高い村雨さんに弄られキャラの士道さん……………。

実は最良のコンビなんじゃなからうか。

ベテラン芸人のそれを思わせる二人のやり取りを無視して、琴里さんが部屋の奥に進んでいく。僕もそれに従い、彼女の後について行った。

琴里さんはメインモニターらしき部屋の中で一番大きいディスプレイの前まで行くと、持っていた中学の物であろう通学鞆を放り投げ、慣れた手つきでツインテールのリボンを付け替える。今度のリボンは僕も見ただことのある黒色のものだ。

リボンの色を変えた琴里さんの顔は、さつきまでの天真爛漫さは

すっかり息を潜め、有能で蠱惑的な女王陛下の表情になっていた。リボンを変えろという動作が、彼女のスイツチを入れ替える役割を持っているのだろう。本人の言葉を借りるなら、「妹モード」から「司令官モード」へと。

「いつまで突っ立っているのよ、土道。案山子にでも転職する気？」

止めときなさい、むしろイナゴに同類と思われて寄りつかれるでしょうから。礼音もそんな寸劇につきあってなくて良いわよ」

言いながらセーラー服の襟のリボンを乱暴に緩め、近くの椅子にどっかと座り込む。うん、こっちの方がなんだかしっくりくる。ちなみに僕はこの時、彼女の椅子の斜め後ろで直立不動の姿勢を作っていた。神無月さんの真似である。もしくは冬月。

「あ、智也、その鞆の中からチュツパチャプスとって。そうね……プリン味がいいわ」

「了解です」

先ほど琴里さんが投げた鞆を手に取り、蓋を開ける。中には大量のチュツパチャプスがささったホルダーが入っていた。……何本携行してるんだらう。一つずつ数えてみたくなるが、その衝動を抑えて左下の端にあったプリン味を抜き取る。琴里さんに手渡そうと彼女を見ると、たばこを挟むような形に二本指を立てていた。そこに持たせれば良いのだろう。

椅子に座ったままの琴里さんに差し出しやすいよう床へ片膝をつきながら、丁寧に彼女の細指へ添えた。

「こちらを」

「ありがとう……良い仕事ね」

「恐悦至極に存じます」

年下の少女への奉仕。これは……癖になるな。神無月さんのように、殴られることすら悦びに変わるレベルでは流石にないが、僕にも少なからずMの素質があるのかもしれない。これも、司令官モードの琴里さんから溢れ出すカリスマの成せる業だろうか。

「……………智也、お前……………」

ああ、土道さんが塩分濃度の高い目でこちらを見ているッ。

こっちは別に嬉しくないッ。

士道さんはその視線を僕から琴里さんに移して言う。

「なあ琴里、お前の『本性』ってどっちなんだ……?」

「本性だなんて、嫌な言い方するわね。そんなことだから彼女いない歴がイコールで年齢なのよ? 少しは学習したらどうかしら」

「……おい」

「統計では、二十二歳まで交際経験がない男は、その半数以上が一生童貞だそうよ」

「まだ5年以上猶予があるわ!」

「先ばかり見て安心していると、あつという間に行き遅れますよ?」

「なんでお前までそっち側で発言してんだよ!? 智也も彼女なんていないんだろ!?!」

「確かに男女交際はしたことはありませんが、別に僕は女性とのつきあい方を知らぬ訳ではありませんよ。耳年増ではありますが、知識は一応」

「へえ……、なら言ってみて頂戴よ。智也の考える女性との上手い関係作りのこっちは?」

「偉大なる先人が一人、とある顎髭ルサンチマンはこう言いました……ガス抜き役に徹すべし……と」

「誰だそいつ」

「何故かはわからないけれど、参考にしちやいけない気がするわ」
ひどい言われようである。

なんとか偉大なるテレッテーさんの名誉を挽回しようと画策していると、いつの間にかなにやら作業をしていた村雨さんから声がかかった。

「……さて、準備ができたよ、琴里。君たちも漫才はその辺にしてくれ」

あなたが言うか。

「……さ、シン、智也。この席に座りたまえ」

「……はい」

「了解です」

「じゃあ、いよいよ調きよ——ゲフンゲフン、訓練を始めるわよ」

「お前今調教って言おうとしたか」

「気のせい気のせい……礼音」

「……ああ」

村雨さんは一つ首肯し、僕たちに向き直る。

「……さつきも言ったが、君たちには女性の扱いに慣れてもらわなければならぬ。……特にシン、君は直接精霊とデートするのだからね」

「はい……」

「……相手の緊張をほぐし、こちらの意思を伝え、好意を持たせる——その時、こちらが緊張しては意味がない」

「女の子との会話って……流石にそれくらいできると思うけど」

「本当かしらね」

と、言うが早いか琴里さん、士道さんの頭を鷲づかんで村雨さんの豊満な胸に押しつけた。

ムニユリとか、フニヤンとか。そんな感じに効果音が聞こえそうな程に、士道さんの顔はどこまでも沈んでいく。

……羨ましくなどないわ。

「……む？」

「——ツ!?!」

士道さんは慌てて琴里さんの手を払いのけ、バツと顔を上げる。

「な、ななななな何しやがるツ!?!」

「なによ、ダメダメじゃないの。とんだチェリーボーイね」

「異議あり!!」

「……まあ良いじゃないか、シン。私は気にしていないし、その為の訓練だ」

マイペースを崩すことなく、村雨さんは落ち着いた様子でパソコンを立ち上げる。全く気にも留めていない。この人は羞恥心がないというのか。

しばらくしてパソコンの画面に現れたのは、所々にハートがちりばめられた背景に、その中で笑顔を浮かべる四人の少女のバストアップ

イラスト。そして——『恋してマイ・リトルシドー』のロゴ。

どっからどう見てもギャルゲじゃねえか。

「こ、これは……」

「……うむ、精霊とのデートに備え、恋愛シミュレーションゲームで特訓だ」

「ツツコミどころしかないッ!!」

「侮らないでもらえる? これはただのギャルゲじゃないのよ。
〈ラタトスク機関〉が総監修で作り上げた、実際にありそうなシチュエーションをリアルに再現している代物なの」

「変態に技術を与えた結果がこれだよ!」

「……………ゴクリ」

「だから何でお前は乗り気なんだ!?!」

一目で解る……クオリティが無駄に高いと……。

士道さんのツツコミも耳に入らない。嗚呼、早くプレイしてえ……。

「……君たちにはこれから、このゲームをクリアしてもらおう。精霊とのデートに向けての練習として、シンがゲームを操作し、智也がバツクアアップという形を取る」

「当たり前だけど、ただプレイするだけじゃダメよ。本番に近い緊張感を持ってもらうために、選択肢のミスにはペナルティを与えるわ」

「ペナルティ……?」

「ええ——これよ」

琴里さんがポケットから取り出したのは、小さく折りたたまれたルーズリーフだった。

よく見ると、右下の角の辺りに“shidouu itsuka”の文字が。しかも筆記体。

「シドウウイツカ……って、これは——」

「そんな……それはあの時捨てた筈の……!?!」

「そう。三年前、中二真っ盛りだった士道が書き溜めたポエムの一つ。

その名も、『墜ちゆく天使のためのプレリユード』よ」

「いいいいいやあああああああああああああ!?!」

「これを智也に校内放送で音読してもらおうわ」

「……………フアツ!?」

「きやああああああああああああ!!」

「ああ、土道が捨てようとしたのを回収しておいたのはこれ一つじゃないわよ。ミスをする度に違うポエムを用意するわ」

「……………!!!」

土道さんの絶叫がとうとう声にならなくなっている。よつぽどの黒歴史らしい。

そんな物を読まされたりしたが最後、僕の学校生活にも終了のお知らせが鳴り響くだろう。

——これは、失敗できない……………。

「さあ、さっさと始めなさい」

無情な琴里さんの言葉で、僕と土道さんの地獄が始まった。

……………これ、ホントに特訓になるのか？

そう思わなくもなかったが、口にするのはやめておいた。

とにかく、今は目の前のことに集中しよう……………。

「……………」

午後四時。物理準備室。

絶対にミスしてはいけないギャルゲ特訓の開始から、早九日。

機械に囲まれた狭い部屋の中は、差し込む西日によって黄金と漆黒のコントラストが生まれ、幻想的な美しさに彩られている。

「……………」

数えきれぬ程試練を乗り越え、数えきれぬ程苦汁を飲んだ。

「……………」

その度に深くなる、心の傷と二人の友情。

共通の痛みを味わい、いつしか僕たちはお互いを相棒と認め合っていた。

——そして、今。

この数日間僕たちが向き合い続けたパソコンの画面には、紆余曲折を経て、ようやく恋人同士として結ばれた青年と抱き合う、幸せに満ちた笑顔の少女と、静かに浮かび上がった“Fin”の文字が映っている。

そう、終わったのだ。ついに終わらせることができたのだ。

「……………」

嗚呼、嗚呼、嗚呼。

涙が、止まらない——

「思ってたより時間かかったわね」

「…………ああ、想定より一日遅れての第一段階クリアだ」

「あああああつ！琴里！」

「あああああつ！村雨さん！」

「何で今喋っちゃうんだ（ですか）!!」

もおおう！折角の余韻が！

「二人とも何でそんなに夢中になっただけなのよ！」

「だって…………だって！お前だって見てたろ！すっげえいい話なんだ」

よこれ！」

「予想通り……いえ、予想の遙か上に行くクオリティの高さでした!!
村雨さんこれ売ってください! 言い値で買いますのでツ!’」

「恋してマイ・リトルシドー」は想像以上に面白いゲームだった。
最初の方こそペナルティを恐れてストーリーを楽しめなかったが、
物語が進むごとにその奥深さに魅了されて、いつの間にかポエム朗読
とか

どうでも良くなっていた。結果としては二十通近いポエムを読ん
だ(中二土道さんのポエムコレクションはまだあるらしい。どんだけ
痛かったんだこの人)し、それは確かにトラウマ物ではあったけれど、
そんな負の記憶を塗りつぶして余りある感動がこのゲームには存在
したのだ。

〈ラタトスク機関〉恐るべし、である。

「ものすごくどうでも良い方向で私たちが評価された気がしたわ、今」
「……何はともあれ、クリアできたのだろうか? なら、次の段階に移行
したいのだが」

どこまでもドライに村雨さんが言う。僕たちにゆつくりと神ゲー
の余韻を楽しませるつもりは毛頭ないようだ。

正直、ミスをしてはならないという特訓のルールのせいで、まだ全
ての選択肢を選びきっていないので、個人的にはクリアとは言いがた
いのだけど、それは我慢しよう。後日村雨さんから買い取らせても
らった後のお楽しみである。

「で? 次の段階って、今度は何をやらせるつもりだ?」

余韻の踏ん切りが付いたのか、土道さんが率先して質問する。

いかにも気の進まなさそうな表情をしているが、だんだんこのノリ
にも慣れてきたのだろう。

第二段階……順当に考えれば、画面の中の女性の次は生身に行くの
だろうか……なんだか嫌な予感がしてきた。

「ナンパよ」

「……ん?」

「ナンパ」

「……………はは、そんなまさか——」

「生徒でも教師でもいいわ。この学校の人間をナンパしてきなさい」
「デスよねー。」

嫌な予感はずぐに当たるもの。いい勉強になった。

「お前は俺に社会的に死ねってのか!？」

「精霊相手のデートでミスしたら物理的に死ぬわよ？一回くらい予行をしなくていいのかしら」

「土道さん、諦めましょう」

「智也はもつと抗おうぜ!？」

HA HA HA そんなことをして一体何になるといふのだね。
人生諦めが肝心なのだ。

「土道、忘れたの？ 予想されていた精霊の出現周期は一週間、もうとつくに過ぎているのよ。今すぐに精霊が現れたとしても不思議じゃないの。もうこれ以上猶予はないのよ。少しでも精霊と話せるようにしたいなら、つべこべ言わずに従いなさい」

「つぐう……………わかった……………」

言い出したのが自分である手前、*「精霊と話す為」*と言われると土道さんも素直に命令を聞くしかない。

色々と悟ったように一つ頷いた彼を見て、村雨さんが無数のモニターを前に言った。

「……………なら、彼女らはどうだろうか」

村雨さんの選んだナンパの相手は、僕らのよく見知った相手達だった。

一時間後、再びの物理準備室。

既にナンパの特訓は終わり、疲労困憊で屍のようになった僕と土道さんが、パイプ椅子にもたれかかって休憩を入れている。

より精霊相手の実戦に近づける為、村雨さんから支給された小型のインカムを用いて、奥で隠れている僕の通信によるサポートを受けな

がら土道さんが口説くという形式で行われたそれは、苛烈を極めるものとなった。ナンパのターゲットになったのは二人。大人の余裕を期待されたタマちゃん先生と、失敗しても言いふらさないであろう鳶一さんである。以下、ダイジェストでお送りします——

1、・VSタマちゃん先生 作戦：弱点を狙う

『二十九歳独身の女性にとつて、結婚というのは確定で急所に当たる八倍ダメージ攻撃です。これで攻めましょう』

『俺ずつと前から、先生と——』

『い、いけませんよお。そんな、教師と生徒の間柄でなんてえ……』

『——先生と、結婚したいと思ってました!』

『……………本気ですね?』

『え』

『いいんですね!? 私でいいんですね!? ちょっと待っててくださいい、いま婚姻届取ってきますから!!』

『ああと、先生……』

『あ、でも土道君まだ結婚できる歳じゃないですね……よし、血判状作りましょつか! 一緒に彫刻刀もらいに行きましょう!』

『土道さん逃げて。超逃げて』

『すいませんでしたああ!!』

結果：敗走 原因：効果がバツグン過ぎた

2、VS鳶一折紙 作戦：共通点を探し、親近感を持たせる

『鳶一さんの好きなものを聞き出しましょう。それに話を合わせて、会話を盛り上げるのです』

『鳶一って、最近ハマっているものとかはあるか?』

『あなたを見ること』

『……………へ?』

『……………とりあえず同意して、打開策を探しましょう』

『りよ、了解——その……鳶一。実は俺も……』

『あなたも?』

『ああ』

『あなたも、私を見つめていた?』

『あ…あ…』

『あなたも、体操服を嗅いだりしていた?』

『ああ。……ああ!』

『これからは、名前で呼んでもいい?』

『……お、おう…』

『士道』

『なんだ……?』

『今からお茶をしない?』

『……逆ナンツ!』

『……なんだか嫌な予感がします。断っておきましょう』

『わりい、この後はちよつと野暮用があつてな』

『そう、残念。……なら、明日私の家に——』

『士道さん、カムバック』

『済まん!急用ができた!』

結果…またも敗走 原因…まさかの変態さんだったでござる

以上、回想終わり。

失敗の全部を人のせいにするつもりはないが、これだけは言わせて欲しい。

「この学校にはこんな人達しかいないんですか!？」

「……智也の立てた作戦も悪くはなかったと思うが、少々対象が個人的すぎたようだね」

「体操服を……いつの間に……」

「先が思いやられるわね……」

全員面持ちが暗い。狭い部屋の中はもはや死屍累々の惨事である。

僕の提案する方法がことごとく裏目に出る。こんな調子で本番は大丈夫なのだろうか。

と。

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

未だ準備の整っていない僕らをあざ笑うように、前触れなく空間震警報が鳴り響いた。

間髪入れずに、村雨さんが数あるパソコンの一つを操作し始める。

「令音」

短く名前を呼んだだけの琴里さんの問いに、村雨さんは迷うことなく返した。

「……余震の規模からして、やはり『彼女』だろう。出現予想地点は——ここだ」

言いながら、村雨さんは真下を指さす。

つまり——来禅高校。そして『彼女』とは、あの名無しの少女のことだ。

「なんてバッドタイミング……いえ、これはこれでグッドタイミングなのかしら」

おあつらえ向きとさえ思える、精霊の出現。否。これでも待つてもらった方なのだろう。当初、精霊は一週間で再び現れると予想されていたところが、それより三日も長く猶予があったのだから。

「全員、一度へフラクシナスに戻るわよ。——土道、智也。覚悟はいわね？ 返答は『イエス』か『はい』よ」

「……ああ。大丈夫だ」

「無論、僕もOKですよ……いっちょよ、やりますかねえ」

程なくして、へフラクシナス艦橋。

僕らが見上げるスクリーンに映し出されるライブ映像の中には、ついさつき発生した空間震によって、かろうじて校舎の形を残してはいるものの無惨に崩壊した来禅高校がある。

精霊——名無しの少女は今、廃墟の学校の内部で静寂を貫いていた。

「この状況……こちらとしては好都合ね」

「攻めるなら今、でしょうか」

僕と琴里さんは互いにそう呟く。

僕と土道さんが精霊との初邂逅を果たしたのは、巨大なクレーターの中心部。すなわち、視界の開けた場所だった。それは敵見必殺の行動を取る精霊の側に圧倒的に有利な地形であり、会話のできる距離までこちらが近づけないことを意味する。遠距離斬撃を躲し、その上で相手に接近してもらえないなどという前のようなラッキーは、そうそう起こるものではない。それに対し、今現在少女が居る校舎は倒壊寸前ではあっても壁が存在する。遮蔽物に身を隠しながら相手に近づけるのだ。

加えて、建造物の中というのも大きい。精霊と話すことの障害となるのは、何も相手の警戒心のみではない。ASTによる妨害もあり得るのだ。その点で言えば、建築物の内部という環境はバーニアで飛び回る彼らが本領を發揮できないであろうエリアだ。いくらアナーキスト軍団でもそう簡単には踏み込めない。

「何が好都合なんだ……?」

「土道君、それはですね——」

いまいち分かってなさそうな土道さんに、アルティメットマゾヒストの神無月さんが現場の説明をする。

仮にもヘフラクシナスの副司令だけあって、アレはアレで有能な人物なのだろう。淀みなく、しかし分かりやすく、この戦況がどれだけ攻め込むのに適しているかを解説していた。

「成る程な……。じゃあ、もう行くってことなのか?」

不安が滲み出している顔で、土道さんが琴里さんにそう訊く。

「司令。彼らを実戦投入するのは、まだ時期尚早では……」

「何あなたまで日和っているのよ神無月。何の問題もない、そう言っているでしょう? それとも、この私の言葉に異を唱える気? 随分偉くなったのねえ、凶に乗っているのかしら。罰として、その床でしばらく水揚げされたイワシの物真似”をしてなさい」

「は、はいー」

厳しく言い返された神無月さんは一秒以内にその場で床に寝転がり、手足をピンと伸ばしてビチビチと跳ね始める。ものすごく目障り

である。

「いや……神無月さんの言うことも間違っていないと思うんだけど……」

「土道まで口答えするなんて、そんなにイワシの物真似がしたいの？」
「誰がなんと言おうとやらんぞ俺はツ!!——って、そうじゃなくてだな……」

「大丈夫だって言ってるじゃない。そんなに不安がらなくても、このへフラクシナスの優秀なクルー達が土道を全力で支援するわ。安心なさい」

「優秀……」

土道さんが、自分の真横で一心不乱にイワシになりきっているビチビチ副司令を見る。

「うん……土道さんの気持ちも分かりますね。能力は高いと知っていても、これを見てると……ちよつと」

「ほ……他のクルーはどんな人達なんだ!？」

不安材料は可能な限り減らしたいのだろう。少し大きい声で尋ねる土道さん。

「ふっふっふ……よくぞ訊いてくれたわ!　そこまで言うなら紹介してあげる!」

上着を優雅に翻しながら、琴里さんは司令官席から立ち上がる。

「まずは!」

そうして、艦橋の下段にあるクルー席の右端を真っ直ぐに指さして、言った。

「五度もの結婚を経験した恋愛マスター。へ早すぎた倦怠期(バッドマリッジ)〈川越!」

「いやそれ四回離婚してんだろ!!」

「あるいは既に五回離婚した可能性も……」

「救えねえ!!」

「夜のお店のフィリピーナに絶大な人気を誇る。へ社長(シャチヨサン)〈幹本!」

「金の魅力以外の何物でもない!!」

「世界一の浪費家に与えられる称号ですよね、シャチヨサンって」
「貯金は大事だぞ!!」

「恋のライバルに次々と不幸が。午前二時の女、〈藁人形（ネイルノツカー）〉〈椎崎!〉」

「絶対呪いかけてるよなあ!!」

「今度やり方教えてください」

「誰にやるつもりだお前!?!」

「百人の嫁を持つ男。〈次元を超える者（ディメンションブレイカー）〉
中津川!」

「その嫁ちゃんどZ軸あるか!?!」

「まさか、あなたがあのゲームを……??!」

「お前かディメンションブレイカー!!」

「その愛の深さ故に、意中の彼に近づくことを法で禁じられた女。〈保護観察処分（ディープラブ）〉〈箕輪!〉」

「純度百パーセントのストーリーカーじゃねえか!!」

「今のところ頼りになりそうなクルーいませんよね」

「〈ヘラトスク機関〉の人選に抗議を申し立てるツ!!」

「そして、〈フラクシナス〉副艦長にして至高のマゾヒスト。〈女王様私を踏んで（クイーンズドアマット）〉〈神無月!〉」

「ハイッ!」（ビチビチビチビチビチ）

「不安要素しかないことはよく分かった!!」

「最後には、完成されたロリコンホイホイである〈対兄専用妹型決戦兵器（グレイテストリトルシスター）〉〈琴里さんが来るんですよ分かります」

「俺の妹をオチにすんじゃねえ!!」

「……皆、腕は確かなんだがな……」

後ろの方から、〈消え失せた睡眠薬（ロスト・ザ・グッドナイト）〉村雨さんの小さな嘆きが聞こえる。

ほとんど人の話を聞かないマイペースな彼女なりに苦労は多いようだ。思わず合掌を捧げてしまう。

「……??! 何故私を拜んでいるんだ?」

「いえ、お気になさらず」

「さあ土道、わかつたらさっさと行きなさい。ASTだっていつまでも待機しているわけじゃないでしょうし、事は一刻を争うのよ」

「つたく……文句言っただって聞きやしないんだろ？」

「よく分かってるじゃないの。その調子よ」

「ああ——行ってくる」

午後五時二十分。

いよいよ、作戦開始だ。

へフラクシナスの転送装置は、直線上に遮蔽物がなければ、瞬時に真下まで移動させられるという代物である。明らかに常識の範疇を逸脱しているSFアイテムだが、一般人の知らない世界の裏側では、この程度の技術はもう当たり前の事らしい。アナキスト軍団も当然とバーニアで自由飛行していたし、ましてやビーム撃つてたし、今の世界の本当の技術レベルは一体どうなっているのやら。思春期の健全な男子として興味が尽きない。

「こちら百目鬼。作戦区域に到着。ターゲットまでのナビゲートを求む。オーバー」

ほんの少しの浮遊感の後、種も仕掛けも理解できないオーバーテクノロジーによって、視界が一瞬でへフラクシナスの転送室から夕暮れの校舎裏なつたことを確認した僕は、すぐに右耳に装着してあったインカムに指を添えて通信を入れた。

若干のノイズを挟んで、琴里さんの声が聞こえてくる。

『了解したわ。精霊がいる教室は三階。近くの階段を上がって、手前から四番目の部屋よ』

「分かりました」

返事を終え、左隣に立っている土道さんの方を向く。彼は、パニツク映画のセットのようになってしまった来禅高校の校舎を見上げていた。

「実際見ると、ホントとんでもねえな……」

今までにも何度か精霊に破壊された建物は見てきたが、こうしてまじまじと観察するのは初めてかもしれない。士道さんの言うとおりで、確かに「とんでもない」ものだ。

壁があつたはずの場所は大きく穴が開いて、中の廊下や教室が丸見えだ。傷だらけの床には割れたガラスが散らばっており、足の踏み場もない。遮るものもないそよ風が、ぎりぎりのところで窓際にぶら下がっているカーテンを淋しく揺らしていた。

この光景を見た人間は、十中八九理性を持たない怪物か何かの仕業と考えるだろう。実のところは、諦観に囚われた可憐な少女の所行であるなど、きつと誰一人想像もつかない。想像がつく訳がない。それほどに暴力的で理不尽な破壊。

「……うし。それじゃ行くぞ、智也」

僕にとっては精霊への畏怖を持たせるだけだった目の前の校舎も、士道さんにとっては何か別の感情を抱かせたようだ。それが一体何なのか。決意か、覚悟か、はたまた優しさか。どこまでも打算的な考えしかできない僕には分からない。唯一つ、僕なんかよりは遙かに高尚だと言うこと意外は、察することもできなかった。

そして僕達は外壁の大穴を身をかがめて通り抜け、校舎内に侵入する。

一步、また一步と進んでいく度に、心臓の鼓動が加速するようだ。十日前、名無しの少女から感じた悪寒が、妖艶な虜美人の指のように僕の背筋をなぞりあげる。あの時と同じ、第六感の警鐘。僕の存在価値が脆くも崩れてしまいそうになる感覚。本能に近い部分で理解した、自分たちは今、確かに「彼女」に近づいている、と。

ほんの一分程度の、けれど、永遠のようにも思えた移動の時間の後、僕たちはついにその教室にたどり着く。

そこで――

「……う？」

僕の思考回路は、何かに支配された。

「て――んこ、二年四組。俺たちのクラスじゃねえか」

『へえ、そうなの、なら尚更好都合ね。地の利って訳じゃないにしろ、全く知らない土地よりは緊張しなくて済むでしょう』

士道さん達の会話が、耳に入ってこない。

これは、何なのだろう。

これで何度目かになる、全身を駆け回る悪寒。多少は慣れてきたからだろうか、それとも自分から精霊に近づいているからだろうか。この感覚を冷静に診断できるようになった僕は、ある違和感に気づいた。

存在が消えそうな感覚に陥る“これ”はしかし、“死の恐怖”ではない気がするのだ。

もつと、大きな物。もつと広い物。

僕の全て。

あえて言葉にするなら、魂だろうか。

それが、痛むのだ。

魂に響く、悪寒。

分からない。

分からない。

——知りたい。

この痛みの伝えんとするところを、その真意を、知りたい。

思考の全てを塗りつぶすような程に強い探究心を前に、僕の自慢の理性はあまりに無力だった。体が、自然と前に動いていく。

「……………智也？　おい——」

士道さんの一歩前に出る。教室の扉まで後二歩。

『智也、止まりなさい。智也？』

琴里さんの指示を無視して、もう一歩進む。教室のドアの取っ手に指を掛ける。

「智也ー」

『士道、止めてー！』

士道さんが僕に手を伸ばす。それより早く、ドアを開け放った。知りたい。ただ、知りたいんだ。

この“虚無感”の正体を——

——瞬間。

猛烈な探究心は消滅し、僕の頭に理性が戻ってきた。その風景に、脳の中がリセットされた。

「あ——」

昼から夜に切り替わる、その直前の黄昏時の紅い光に抱かれた教室の、一角。

前から四番目、窓際から二番目の場所。ちょうど土道さんの机に、彼女は、片膝を立てて座っている。

割れた窓から入り込む微風に艶やかな黒髪を揺らし、人の文明など足下にも及ばぬドレスを纏って、不可思議な輝きの瞳を半眼にし、目の前の黒板を憂鬱そうな顔で見つめていた。

「——ぬ？」

目が合う。

彼女は、半眼であったその目蓋を見開いて、僕らをその視界に納めた。

「待ってって、智……や……」

僕を止めようと教室に入ってきた土道さんも、遅れて彼女と視線を合わせる。

なんて神秘的なのだろう。逢魔が時の空に、崩壊した教室。そこに佇む一人の少女。彼女がいると言うだけで、恐ろしげな廃校舎も主役を引き立てるだけの存在に変わってしまう。

「……ッ！ や、やあ——」

だが、そんな映画のワンシーンのようなひと時は、他ならぬ主演の少女の手で切り捨てられた。

土道さんが右手を挙げて挨拶をしようとした瞬間、彼女が無造作に手を振り、一条の黒い光を僕と土道さんの間に走らせる。同時に、僕たちの背後から何か木材がへし折れるような音が響いた。さつき通ってきたドアが粉碎されたのだろう。

「動くな」

それだけ言って、少女は右手を上へと向ける。開かれた手のひらには闇色の奔流が集まっていた。

一目見ただけでも、その黒球がおぞましい質量を孕んでいるのだと察せられる。

『いけない！ 士道、智也！ 回避を——』

「ちよつと待つて頂けませんか？」

闇の収束が、止まる。

「……なんだ？」

「ああ失礼、あなたには名が無いようですが、一応の礼節としてこちららは名乗っておきましょうか。僕は百目鬼智也と申します。……この台詞は二回目ですね。お久しぶりです、僕らのことを覚えておいでですか？」

今はもう無くなった、さつきまでの衝動。あれが何だったのかは分からないが、僕の行動のせいと彼女がここまで警戒しているのは間違いない。もつと上手くやれたはずなのだ。なら、自分の失敗くらい自分で尻ぬぐいしなければ。

「………？ ……おお、思い出したぞ。なにやらおかしな事を言っていた連中だ」

「ああ、それはありがたい。なら——」

僕が続いて口を開いた瞬間、彼女の右手の上で球状になっていた黒い光から、僕達に当たらない軌道で何発かビームが放たれる。今度は、窓ガラスの割れる音がした。

「そのままでいろ。お前達は今、私の攻撃可能範囲内にいる」

「……穏やかじゃありませんね」

話を聞く気はあるようだが、迎撃態勢を崩しはしない。その目には未だ、警戒の光が色濃く残っていた。けれど、人間全てを敵と認識している彼女の立場からすれば、相手を脅すことなど全くの無意味の筈である。なのに、すぐにこちらを撃つてこないということは、会話の意思があることの裏返しだ。それが脅迫であれ示談であれ、話をする糸口さえあればいい。

「ご安心を。僕らは丸腰ですし、近くに隠れている仲間もいません。あなたに危害を加える気はありませんよ」

「信用ならんな。そのような言葉に騙されるか」

「信用できないならそれでも結構。それに、あくまで僕はただの付き添いですからね」

「付き添いだと……?」

「ええ、こちらの彼の付き添いなのです。なにやらあなたに用事があるそうなんです、一人では怖いとのことで……」

士道さんが「ここで俺に振るのか!？」と言わんばかりの顔を向けてきた。

この期に及んでまだ腰が引けているらしい。

「おい、そっちのお前」

「お、俺か?」

「そうだ……確かお前は、私を殺すつもりはない——とか、言っていたか」

無事士道さんが会話の相手に選ばれたようだ。まだ安心できる流れてはないが、彼女の方から話しかけられたのは悪くない。士道さんにはなんとかここでイメージアップをしてもらいたい。

「……………ああ、そうだ。俺は——」

「フン、見え透いた手を」

「——え?」

だが、僕のそんな思惑は上手くいく事は無かった。士道さんの、真っ直ぐな思い。彼の正義感に溢れた彼女への気持ちは、当の本人に欠片も届いていなかったのだ。

彼女の表情に変化はない。だが、彼女が掲げる黒球からはまたも光線が撃たれる。しかも、今度は士道さんの頬をかすめ、彼の顔に赤く血の軌跡を残して。

「一体何が狙いだ? 私を懐柔し、後ろから撃ち殺す腹つもりか」

「……………ツ!!」

その言葉を聞いた瞬間。士道さんの表情から怯えが消え、眉根が大きく歪む。

本人は無意識だろうが、両の拳には次第に力が入り、歯ぎしりまで聞こえていた。

理不尽に怒りを燃やすかのように、不条理に悔しさを噛み締めるよ

うに。

「……前にも、言った筈だ……！」

「——ッ！」

唐突に土道さんから沸き上がった、敵意でも、害意でもない、だが何より激しい感情。それを正面からぶつけられた少女は、これまでの経験則からか、あるいは反射的にか、右手を振り下ろして黒球を投げつける。サッカーボール程の大きさのそれは、僕達の立っている場所から少し前の床に着弾し、衝撃波を発した。

爆発音と共に、教室のタイル張りの床に大きな穴ができる。

「つぐう……！」

直撃していないとは信じがたい威力に、僕は思わずうめき声を上げて後ずさってしまったが、土道さんは少しだけよろめいただけで留まり、少女に激情を向けるのを止めようとはしなかった。

「言った筈だ……そんなの……間違ってるって……!!」

『土道、落ち着きなさい』

「いえ、琴里さん……このまま土道さんに任せましょう」

『このままでは危険よ、一旦頭を冷やすべきだわ』

「大丈夫だと思いますよ……彼なら」

大して長いつきあいでもないけれど、なんとなく確信が持てた。土道さんなら、彼女の心を開ける。底抜けに直線的な彼の感情論は、名無しの精霊の作り出す拒絶という障害を吹き飛ばせると思うのだ。

「あなたのお兄さんはそういう人だ……違いますか？」

『……ふん。そんなの、妹の私が一番分かってるわよ』

土道さんは、もう、止まらない。どっちみち、僕らの声は聞こえていない。

その勢いのままに、少女の魂に肉薄する——

「人間はッ、お前を殺そうとする奴ばかりじゃないんだ！」

「……違う。……今まで私が見てきた人間達は皆、私に刃を向けた。皆、私は死ぬべきなのだと言っていた……。言葉で、凶器で——視線で。私に死ねと言ってきた」

「それでもッ……俺は、違う！ どの誰が何言ったかなんて知った

「事かよ！」

「……嘘だ」

「嘘じゃない！」

「黙れ——不快だ」

無理矢理に土道さんの言葉を遮って、彼女は「距離を殺した」。初めて彼女に会った時にも見た、音も無く、気配も発さず、瞬く間にこちらに詰め寄る移動法。

テレポートとしか言えないそれで土道さんの目の前に立った少女は、土道さんの前髪を鷲つかみ、力づくで押さえつけた。

「うっ……！」

「どうせ、私を殺そうとするんだろう？ その為に私の元へ来たのだろうか？ 言え。貴様はその為にここに来た」と

「……話を、する為だッ……」

「——何？」

「俺は……ッ、お前と話をする為に、ここに来た！」

どうして、土道さんはあそこまで必死になれるのだろう。化け物と言って差し支えないような相手に、頭を掴まれ、押さえつけられ、あまつさえ脅迫までされているのに、土道さんの思いは変わらない。

その想いは揺らがない。

世界を救う英雄のように、剛毅に満ちた念いは壊れない。

何か信念のようなものがあるのだろうか。それとも、理由など無いのだろうか。

だがしかし、例え前者と後者どちらであったとしても、彼には関係ないことだろう。

「内容なんてどうでもいい……気に入らなければ無視されたって構わない……」

なぜなら、彼は「救いたい」だけだから。

どんな理由、考え、背景があつたところで、突き詰めればその一点にたどり着く。

僕は、それを知っている。

《……好き好んで世界をぶっ壊す奴は、絶対にあんな顔、しねえんだよ

……》

「けど、これだけは分かって欲しい……俺は——」

届かなくとも、通じなくとも、彼は愚直に、救おうとし続けるのだ。

「——俺はッ……お前を否定しない!!」

さあ、精霊よ。名無しの少女よ。

あなたは、彼の救いを受けるのか。

「——俺はッ……お前を否定しない!!」

「ッ！」

名無しの少女が息をのむ。・

思いが……届いた……の、だろうか？

土道さんの前髪を握っていた手はゆっくりと開かれ、彼女自身も徐々に後退する。

自由を得た土道さんは、くしゃくしゃになった髪を直すこともせず、そのまま少女を見つめながら立ち上がった。

それから、しばしの沈黙。

十秒ほど経って、少女が口を開いた。

「お前、シドーといったか？」

「——ああ」

少女は目を泳がせ、土道さんの顔を見ないままに彼に聞いた。

土道さんは一切間を置くことなく返答する。

「本当に、私を否定しないのだな？」

「ああ」

「本当だな？」

「本当だ」

「絶対だな？」

「絶対だ」

「何があってもだな？」

「何があってもだ」

何回か押し問答を繰り返した後、少女は回れ右をして僕らに背を向けた。

頭を乱暴に掻き、一度鼻をすすったような音が聞こえて、こちらに向き直る。

……泣いてたんか？この子。

「……………ふん」

振り向いた少女の顔には「不機嫌だ」と書いてあるかのようだ。眉根は寄せられ、口はへの字になっている。

だが、不思議とその表情にさつきまでのような恐ろしさは無い。と言いかむしろ、なんとなく愛嬌さえ感じる。

「誰がそんな言葉に騙されるか。ばーかばーか」
子供かよ。

精神年齢が一気に低下したような彼女の口調の変化について内心でツツコンでしまった。

思っていることが顔に出にくい自分の性質に感謝だ。今の心の声が外に出ていたら、僕は彼女の怒りを買って死んでいたかもしれない。

「ばーかって……だから俺は——」

「だが、まあ、アレだ」

彼女は、不機嫌そうな表情を少しだけ緩ませて、続ける。

「私とまともに会話をしようなどと考える奴は初めて見るからな。この世界の情報を手に入れるまたとないチャンスだ」

「……つてこたあ……つまり」

「勘違いをするな!? 私はいくまで、お前から情報を得るために話をするのだ! 決して口車に乗せられたからでは無いぞ!」

土道さんの疑問の声に、少しかぶせ気味に少女が否定を入れた。

口調そのものは荒いが、結局は嬉しさがにじみ出してしまうのか、よくよく見ると彼女の頬はわずかに赤く染まっている。実に素直じゃない。

と、言うか、だ。

「僕、すっかり蚊帳の外ですね」

「では、早速だがシドー。聞きたいことがある」

「うん? なんだ?」

「ここは一体何なのだ? 狭く仕切られた部屋に、十や二十では下らぬ椅子。さらには似たような造りの空間がいくつも並んでいる。よもや、この椅子一つ一つに人間が納まるのではなからう?」

「いや、その通りだ。ここは学校って言うところだ」

「何だど!? これ程の人数の人間が集まる場所なのか!? 信じられぬ

！ 前衛基地か!!」

「いやいや……そんな物騒なもんじゃねえよ。……いいか？ 学校つてのはな——」

完全に置いてきぼりだ。会話に入る余地が無い。

元々、僕の仕事は士道さんが精霊をデートに誘うまでのサポート。彼が精霊と仲良くなることに成功した今、士道さんだけでもデートに誘うくらいは可能だろう。ここにきて僕が存在はただのお邪魔虫に成り下がった訳である。

そう理解した途端に、僕は暇をもてあまし始めた。

あまり動きを見せて少女の注意がこつちに向いてしまったら、せつかくの雰囲気は台無しになってしまうので、ブラブラと歩き回ることもできない。当然、直立姿勢のままにいる必要がある。

仕方なく、窓の外の夕焼けの空をぼーっと眺めながら、だいぶ打ち解けたらしい二人の歓談に耳を傾ける。

「そうなのか……年端もいかぬ幼い内から思想や概念を教育し、いつでも戦線へ赴けるよう鍛えるのだな」

「違う違う。幼いころから教育つてのはその通りだが、別に戦わせるためとか、そういうアレじゃねーよ」

「む？ ならば一体何のためにこれ程の数の人間を一所に集めてまで勉強をさせるのだ」

「……ええつと、それは。……そうだな、生きていくため——とかか？」

「……何故だ？ 生きたいのなら自由に生きればよからう」

「ああ、この言い方やダメか……うーん、正確には、人間社会で生きるため……って感じか」

「社会？」

「そう、社会。……ああ、説明が難しいな。えつとな、この世にはお前が見たことあるよりずっと多くの人間が居て、一人一人が違う役割を持って生きてるんだ。その集まりが社会。そんな風な色んな役割の人々の社会の中に参加できるように、若い内に自分だけの役割を探すんだよ。んで、学校はその手伝いをしてくれる場所なんだ」

「二人一人か……人間の役割にはそんなに数えきれぬ種類があるのか」

「……まあ、そうだな。俺もよくわかんないけど、きつと全く同じ役割なんて一個も無いと思うぞ」

「それだけ多岐にわたるのなら、中にはいくつか役割が誰かと重なってしまふものではないか？」

「そうかもしれないけど……でも、だからって必要ないって事は無いはずだ。人間には皆自分だけの名前があるみたいに、例え他人と似たような役目でも、自分だけの能力つてのはあんだよ……たぶん」

「名……か。そうだ……なあシドーよ」

「どうした？ まだ質問があるのか？ いいぞ。幾らでも答えてやる」

「いや、そうではなくてな——お前は、私を何と呼びたい？」

「……ん？」

「……ん？」

「こうして話す以上、呼び名が無くてはどうにも不便だからな」

「はっ」

「そのドームメキとやらは、私に名を名乗った。だが、私は名乗るべき名を持たない」

心を無にして話を聞いていたら、なにやら不穏な流れになっていた。

近くにあった席に軽くもたれかかり、リラックスした風のまま名無しの少女は爆弾発言を投下する。

「シドー、私に名を付けろ」

「……………おうふ。」

「……………」

士道さん、フリーズ。

宜なるかな。

「はああああああ!？」

こりやまた、とんでもなく地雷臭のする要望が来たモノだ。一高校生風情にはちとばかり荷が重い。

途中までいい話だったのに、士道さんの人生論を聞けるのはここまでのようだ。

「琴里さん、何か良いの無いですかね？」

こうなれば僕も知らぬ存ぜぬという訳にもいかず、サポートを再開する。

名無しの少女には、僕らには隠れている仲間は居ないと言ってある。それは間違っていないが、連絡を取っている仲間なら居るのだ。下手に少女に勘ぐられても困るので、琴里さん達の存在はバレないように気をつける方が良さそう。そうすると、僕が琴里さんの言葉を代弁する形にするのが良いだろう。

そう考え、僕は右耳のインカムを軽く抑えながら周りには聞こえないように小さく尋ねた。

『ちよつと待ってなさい』

インカムから琴里さんの返答が聞こえてくる。この声は士道さんにも聞こえている筈だ。焦りまくっている彼には申し訳ないが、しばらくは時間稼ぎのためにウンウンと悩んでいてもらおう。

『流石に個人の名前をAIに考えさせる訳にはいかないわ！ 総員、今すぐ彼女の名前を考えて私の端末に送りなさい！』

どうやらクルーの皆さんに名付けさせるつもりのようなが、〈フラクシナス〉のクルーは言わずと知れた変人軍団である。嫌な予感しかない。

『まずは川越ね……ちよつと！ 美佐子って別れた奥さんの名前じゃない！』

『すいません！ 思いつかなかったもので……』

バッドマリッジの別れた奥さん……何番目だろうか。

いや、それ以前に名付けとしては普通にアウトである。

『次は…幹本ね……これなんて読むのよ』

『麗鐘（クララベル）です！』

シャチヨサン、まさかのキラキラネーム推し。

『幹本は一生涯子供を持つことを禁ずるわ』

まあ、うん。そうなるわな。

『もう一番上の子が小学生です!』

『一番上?』

『はい! 三人います!』

『名前は』

『上から、美空(びゅあつぷる)、振門体(ふるもんてい)、聖良布夢(せらふいむ)です!』

これはひどい。

何がって、色々ひどい。

「……………」

士道さんが切羽詰まった様子でインカムを小突く。「早くしてくれ」という意味だろう。

だが、これは名無しの少女の一生に関わる問題だ、急かしても良いことがあるとは思えない。ここはなんとか時間稼ぎをせねば。

いつまで経っても考えてばかりで案の一つも出さない士道さんを黙って待っている少女に、意を決して話しかけた。

「お一ついいです?」

「なんだ? ドーメキ。私はシドーに名をつけろと言ったのだ。お前には聞いていないぞ」

「辛辣ですねえ……別にそういうつもりじゃないです。ただ、いきなり命名なんて、何の指針もないとやっぱ難しいですからね。シドーさんを手助けすると思って、ここは一つ、どんな風な名が良いかあなたにも考えて欲しくて。他ならぬあなた自身の名前なんですし」

「ふむ……一理あるな」

よし、彼女も一緒に考え初めた。これでいくらか時間が出来ただろう。僕は再び小声でインカムに語りかける。

「今のうちです、琴里さん」

『ナイスよ智也。さあ、総員次の案を出しなさい!』

なんとかか上手くいった。頼むから、今度はちゃんとした意見が出ますように。

『こんなのはどうでしょうか! 司令!』

ネイルノツカー椎崎さんの声がインカム越しに耳に響く。

思い人の周辺人物を片っ端から呪いに掛けるといふ彼女だが、そのネーミングセンスはいかに。

『妙（たえ）です！』

やったね！たえちゃ……おいやめろ。

『古風すぎない？ 幹本ほどではなくても良いけど、もう少し華やかさが欲しいわね』

どうしてだろうか。不意に「あんたが言うな」と思った。

そして突っ込むべきはそこじゃない。流石は午前二時の女、名前すら呪われそうである。日本全国のたえさんには申し訳ないが、そう思わざるを得ない。

『整いました！』

『はい中津川！』

今度はディメンションブレイカーの番らしい。つか、整いましたってなんだ。

もうただの大喜利と化してんじゃないか。ツツコミ不在の恐怖である。

『複数考えてありますゆえ、順に発表します！』

『流石ね、期待してるわ』

『まずは、濤（みお）です！』

お？ 意外とまともな感じの名前。

『次に、箒（ほうき）！』

……………むむむ？

『続いて、ほむら！』

……………むむむ？

『最後に、夜空（よぞら）でございます！』

……………うん。

「ギルティ！」

「うおっ!? どうした智也!？」

「なんだ！ 敵か!！」

「す、すいません……何でも無いです」

「こればかりは思わずツツコミでしまった。」

慌てて土道さんと少女に頭を下げて後ろを向き、声のボリュームに気をつけながら通信する。

「中津川さん……それはダメだと思えます」

『？ なにがいけなかったの？ どれも良い名前だと思ったのだけど』

「琴里さん。今の四つ、全部アニメキャラの名前です」

『……なんですか？』

「しかも、全員黒髪ロングでクール系です」

ついでに言えば残念美人だ。

『おお！ お解りにござるか百日鬼殿！ やはりこちら側の人間！』

『………中津川』

『はい！ お気に召す名前はあったで——』

『以後発言禁止』

『——ご無体なっ!?!』

琴里さんの無情なる審判が中津川さんに下る。擁護出来ようはずも無し、罪人はただ頭を垂れて意気消沈するばかり。

それはそれとして、やはり彼とは話が合いそうだ。

『さあ、最後は箕輪ね』

『え、えつとお……』

ラストはディーラブ箕輪さん。もう期待などしない。せめて、普通の名前を……。

『古風だけど女の子らしくて、綺麗な黒髪をイメージ……さ、貞子』

『……とか？』

『………』

………。

「土道さん」

「………なんだ？」

「僕らだけでなんとかしましょう」

「ああ……そうだな」

『あの、やっぱりだめですか。そうですね、貞子なんてダメに決まっていますよね』

『土道、彼女と初めて会った時の印象から名付けるなんてどうかしら』
「名は体を表しますからね。第一印象から付けるといいのは良い案です」

「そうだな、それが良い。あの時のことを思い出しながら考えてみるぜ」

『あの、ごめんなさい。ほんと、謝りますから、お願いします』

「あの日は確か、四月の十日で……綺麗な青空で」

「綺麗な空……モチーフとしては申し分ないですが、彼女のイメージとは少し離れてしまいませんか」

『そうね、この精霊は青空より夜のほうがしっくりくるわ』

「じゃあ他の印象で……」

『お願いだから無視はやめてっ!?!』

数分後。

「トールカ。君の名前はトールカだ!」

ああでもないこうでもない頭をひねること都合十回以上。これ以上精霊を待たせるのも不可能になってきたタイミングで、土道さんが咄嗟に言い放ったへトールカという名前が採用された。

さつきまでの僕らの苦労は何だったのか。

「まあ、いい。さつきまでのトメだのソラミだのよりはましだ」

トメとソラミが誰の案なのかは、まあ、個人の名誉のため伏せるとしよう。思い出したくもない。

とにかく、これで彼女の名は決まったのだ。

「それで? トールカとはどう書くのだ?」

「あ、ああ。——こう……だな」

彼女からの問いを受け、土道さんがチョークで黒板に漢字を書いていく。

しばらくの間カツカツという音が教室に響き、それが止むと同時、土道さんが体を横にずらして書き上がったものを見せた。

十香。

それが、この漆黒の精霊の名。

「ふむ……」

自らの名前をしばし見つめていた彼女は、士道さんの書いた筆跡を真似るように、黒板を指でなぞる。

指の先端には小さな黒球があり、それでもつて黒板を削り文字を書いていた。

士道さんの時とは異なり、何の音もしないまま、しかしチョークのそれよりもはつきりと、彼女の名は刻まれていく。

「シドー」

名無しだった精霊の少女は、少しの間書き上がった自分の字を見つめて満足げに頷いた後、僕らが初めて目にする微笑みの表情でこちらを振り返る。

「十香」

「え？」

「十香。私の名だ……素敵だろうか？」

立会人は、たったの二人。この場に居ない観測者達を含めても十人程度。

世界を殺す少女を見守る人数としてはあまりに少数。

だが、それでいい。

これが。このほんの僅かな人数が、

この世界に精霊を受け入れた人間達の、記念すべき第一号だ。

人間の青年から名を授かったことで、災厄の化身はただの少女となるための一步を踏み出す。

僕らはその瞬間の目撃者となったのだ。

黒板に新たに刻まれた二文字は、隣にあるチョークで書かれたものに比べて歪な形をしている。

お世辞にも綺麗な字とは言えないが、その存在感こそが彼女の在り方の証明なのだろう。

これからきつと、少しずつ隣の字に似てくる筈だ。

書き方も、形も、癖も。

士道さんが、変えていく筈だ。

「シドー」

「…と、十香」

願わくば、彼らの紡ぐ物語の糸の一片にでも、僕を絡ませてもらいたいものだ。

僕は、この人達の行く末を見守っていたい。

読者ではなく、登場人物として、そばに居たいのだ。

互いに見つめ合い、名を呼び合い、彼らの心の距離は縮まっていく。

十香さんは天女の如き柔らかな笑みで。士道さんは気恥ずかしさに頬を朱に染めて。

これ以上無いと言って良いムードだ。自分が邪魔者であることを思い出した僕は、足音を忍ばせ窓際に行き、そこで静かに待機を――

――することはできなかった。

突如、爆音が辺りに轟き、凄まじい震動が半壊状態の校舎を激しく揺らす。

「な、なんだ……ッ!？」

『二人とも伏せなさい』

「へ………?？」

よろめきながら視線を向けた窓の外。後半時と待たずに夜の帳が降りるであろう空には、十人弱のAST隊員が浮遊していて、

その全員が両手に持つガトリング砲の銃口が、僕らの居る教室へ向けられていた。

『早く伏せて!』

「!!!」

あまりにも突然すぎる出来事に叫び声も上げられず、その場で床に腹からダイブする形で倒れ込んだ刹那。おぞましい量と速度の銃弾が校舎を撃ち抜いていく。

なんとか緊急回避で銃弾を躲したが、僅かに間に合わず砕け散ったガラス片が降り注ぎ、未だ汚れの少なかつたブレザーをボロボロに傷つける。そのうち幾つかは僕自身の体にも小さくない切り傷を残し

た。

十秒にも満たない時間で弾の嵐は過ぎ去り、教室には現実味が戻る。今度はこことは違う教室が集中砲火されているようだ。少し離れた所から絶え間ない銃声が聞こえていた。

恐る恐る床タイルとキスをしていた顔を上げていくと、まず僕と同じようなポーズの土道さんと目が合う。とりあえず彼は無事だったようだ。僕と異なり窓から遠い位置に居たからか、ガラス片で怪我をした様子もない。

もう少し視線を上げていくと、さっきまでと同じ姿勢の十香さんが確認できた。

流石は精霊。あの程度の攻撃は歯牙にも掛けないということか。何事も無かったかのようだ——いや、違った。

彼女の表情が視界に入った瞬間、その凄惨極まる悲壮感に言葉を失う。

今まで土道さんと対していた笑顔とは180度異なる痛ましいものの。

十香さんの体には、銃弾やガラスによるダメージなど微塵もない。だがしかしその精神は、明確に負傷していた。

あるいは致命傷かもしれないと思ってしまうほど、絶望に満ちた顔で、窓の外をじっと見つめていた。

「っ……………」

掛ける言葉が、見つからない。

「十香!!」

「…………っ、シドー……」

息をのむだけだった僕の代わりに、土道さんがその名を呼んだ。

その声にハツとした様子で、十香さんが視線を窓の外から土道さんに移す。

「…………逃げろ、シドー、ドーマキ。私などと共にいては、お前達が同胞に討たれてしまう」

そう静かに、逃げることを勧められる。

確かに、このままこの場にいることは自殺行為だ。だが、ここで逃

げを選択してしまう方がより悪手である。

僕らの、士道さんの目的は精霊の平和的無力化。もとより多少の怪我は覚悟の上だ。

それに何より、士道さんが傷ついた少女を目の前にそれを放置することを認めないだろう。

『どうするの？ 士道。逃げるか、留まるか』

琴里さんの声が聞こえる。

士道さんは、一瞬だけ逡巡を見せ、

「逃げられるかよ…………ツ」

どこか苛立たしげにそう言った。

『馬鹿ね』

「…………勝手に言ってる」

『これは褒め言葉よ？ 士道のその蛮勇へのね…………そうね、一つアドバイスをあげる。死にたくないなら、精霊のそばにいる事よ』

「おう、分かった」

『それと——智也』

琴里さんは話しかける相手を僕に変え、さらに続けた。

『あなたは、ここまでよ』

「……………この怪我なら、大したことはありませんよ？」

『大したことがある怪我かどうかは司令たる私が決める事よ。異論は聞かないし、認めもしないわ』

「しかし、僕の役割はどうするんです？ 士道さんの身に迫る危険の察知。先の銃撃を見る限り未だ出番があるように思われますが」

『危険なのはあなたの方よ、さっきのASTの攻撃は感知できてなかったじゃない』

「……………それは」

言われてみればその通りだった。

精霊の放つ攻撃、もしくは精霊によって起こされる危機を知らせてくれる僕の第六感、ガトリング砲の一斉射には反応しなかった。

……………何故だ…？

指摘された事実で動揺する僕に構わず、琴里さんが言う。

『心配せずとも、土道はその程度じゃ死にやしない。言ったでしよう？ 土道は特別なものよ。仮に智也がASTが撃つてくるタイムミングを計れたとしても、それは無意味なのよ』

「……随分とはつきり言ってくれますねえ」

『不必要に甘い言葉を選んであなたに死なれても、こっちは責任負えないもの。当然でしょう？』

「まあ、雇用主がそうおっしゃるのでしたら、僕は従いましょう」

釈然としないことも、気になることもある。それ以上に、ここで土道さんより一足早く退場することを残念に思う気持ちもある。

けれど、今の僕に琴里さんの言葉を覆すほどのカードは無い。

口から出任せを吐いて言いくるめても良いが、そんな嘘じゃ駄目だ。その場しのぎにもなりやしない。結論ありきの嘘には矛盾が生まれる。

結局僕に出来るのは、大人しく退散することだけだった。

「すみません十香さん、僕は帰らせていただきますよ。土道さん、後は頼みます」

「…智也、ここまでありがとうな」

「な——」

「十香さん、土道さんのことお願いしますね。出来れば、守ってあげてください」

「ま、待て！ 何を言っているのだ。シドーも早く——」

「十香、良いんだよ。俺は残る」

「だが、シドー……」

「言つたら？ 俺はお前と話をしたくてここに来たんだ。まだ俺たちのお話タイムは終わっちゃいない。あんな奴らのことなんか気にすんな」

言いながら、土道さんはその場の床に胡座を掻いて座り込む。テコでも動かないという意思の表れだろう。

その姿を見た十香さんは、ほんの一瞬だけ困惑した表情を作り、そして土道さんの向かいに座った。

「……………」

士道さんと十香さんが心を通わせていることがはつきりと伝わってくるその光景は、しかし、僕には自分がお払い箱となったことへの皮肉のように見えてならなかった。

名無しの精霊に「十香」という人間の名が付けられた記念すべき日の翌日。

僕は今、黒単色のTシャツにベージュのカーゴパンツというラフな服を着て日本晴れの街を歩いている。

別に目的地など無い。ただ無計画に散策をしているだけだ。

強いて言うのなら、引越してきたばかりの天宮市に慣れて土地勘を身につけることが目標だが、それについても深くは考えていない。

何故平日の昼間に学生たる僕が暢気に散策などしているのかと言えば、そりゃあ学校が無いからだ。しかも、物理的に。昨日、十香さんの顛界によって発生した空間震で、都立来禅高校は見るも無惨な姿になってしまった。

A S Tが所有する顕現装置（リアライザ）とか言うひみつ道具的な物を使えば、僅か数日で元通りに直せるらしいが、それでも一日二日では不可能とのことで、結果今日は校舎修復のため臨時で休校日となっている訳である。

「……………」

ひたすら住宅地が続いていた景色はいつの間にか大通りに変わっていて、場所の移動に伴い周辺の空気も活気づいた物になっている。現在時刻八時過ぎ。通勤ラッシュの時間帯に突入した広い道路には大量の車の往来が絶えない。

僕が街に繰り出してから既に一時間余りが経過し、天宮市は次第にその賑やかさを増していた。数日前、土道さんと初めて会った日に駆け抜けた無人の街とは天地の差だ。

しかし、歩みを進める僕はそれらの変化を気にも留めず悩んでばかりいた。その悩みの内容とはすなわち――

「給料、ちゃんと貰えんのかな……………」
である。

昨日の僕はと言えば、足手まといも良いところであった。物陰に隠れて通信をする筈の自分が暴走して真っ先に現場に突入するし、いい

雰囲気の士道さん達に気の利いたことの一つも言えないし、挙げ句には一番の使命である危険察知が働かないという失態。流石に給料全カットということは無かろうが、何割か削られても文句は言えない体たらくだ。

「……役に立ってなかったし、やっぱ減るかな……」

せつかくの平日休みであるのに、全く気分が乗らない。憂鬱そのものである。

嗚呼……他の誰でも無い自分のせいとは言え、やはり不安だ。

「…………ハアア……」

「ため息つくと、幸せが逃避行始めちゃうよ?」

「…………ため息は副交感神経を優位にさせてリラックスさせる働きがあるので、一概にそうとは言えませんよ。それに逃避行って何ですか、ただ逃げるだけじゃないんですか……………ん??」

唐突に背後から聞こえてきた声に、条件反射で反論をしてから我に返り、振り向いてみる。

そこにいたのは、*へフラクシナス*が誇る麗しきロリッ子司令官に、常にフラフラしている不眠美女。

「智也、おっはようーう!」

「…………やあ」

琴里さん妹モードエディションと、相変わらず不健康そうな村雨さんであった。

琴里さんは以前来禅高校でも見た白を基調とした中学校の制服姿で、対する村雨さんはカットソーにデーパードタイプのジーンズという大人な香り漂う私服姿である。

「おや、おはようございませすご両人。琴里さんは学校は修復中ですか?」

「いぐざくとりー! それで暇になったから令音呼び出して一緒に散歩してたんだよ」

「左様でしたか……………それで、どこから聞いてました?」

「給料ちゃんと貰えんのかな……………の、あたり」

「成る程、最初からですね」

意地の悪い御仁だ。

「……心配せずとも、給料はちゃんと出るさ。そういう契約だ」

「結果的にデートに誘うのは成功してるから、だいじょうぶだよ」

そう、デートには誘えている。だがそれは――

「それは、土道さんの功績でしょう。僕が退避した後、危険地帯に一人残って会話を続けた彼の働きです」

「それは確かにそうだけどね。ヘタレチキンなおにーちゃんにしてはすごく頑張ってたよ」

「ですよ。それに対して僕なんて――」

「でも、そこに智也の影響がなかったなんて事はないと思うな」

「――影響?」

「うん、影響」

「と、言うത്?」

「……シンが十香をデートに誘う際、私たちへフラクシナス<クルーの支援はほぼなかった。タイミングも、言葉も、全て彼が自分で選んでいたから、必要がなかったんだ。君はその時医務室にいたから知らないだろうがね」

「そうなのですか……」

村雨さんの言葉は確かに初耳の情報だ。僕は昨日へフラクシナス<に戻ってすぐ怪我の処置をするよう言われブリッジには向かわなかったのも、土道さんが無事任務を成功させたとの結果だけを見知らぬクルーの人物から報告されたのみなのだ。

村雨さんの台詞の後を継ぐように、琴里さんが妹モードの口調のままで続ける。

「私がいつも見てるはぐれメンタルチキンのおにーちゃんとは、明らかに違ったよ。一生懸命冷静になろうとしてた」

「はぐれメンタル……」

なんとも経験値の旨そうな精神状態だ。

「私、それはきつと智也のおかげだと思おうの」

「……そうだと、良いんですがね……」

「んんう……さつきからウジウジウジ五月蠅いなー。せーつかく

フォローしてあげてるのにー。智也実は給料いらないんじゃないの？」

「い、いいえっ！ そんなことは！」

「問答無用!! 智也のお望み通り給料カットしてあげる！」

「ご無体な！」

「と、言・う・わ・け・で・く、あそこっ！ 奢って？」

「へ？」

琴里さんは自らの放ったリズムカルな言葉に合わせ僕の斜め後ろの方向を指さした。

そこにあつたのは、女性が好きそうな洒落なカフェ。

「ちようど歩き疲れたから、おやつタイムにしたかったんだよねー」

拒否権はなさそうである。

「令音のそれもーらい……んー、おーいしい。なんで令音はラズベリー嫌いかなあ」

「……すっぱいじゃないか」

「村雨さんは結構な甘党なんですね。それでしたら、僕のフォンダンシヨコラ一口いかがです？ 実は少し持て余してしまってます」

「……いいのかい？ なら遠慮なく頂こう」

「どうぞどうぞ」

「ん！ フォンダンシヨコラ私も！」

「いいですよ。あ、その代わり琴里さんのタルト一口いいですか？

ちよつと気になってたんですよ」

「いいよー。えつとーそれでね？ 話の続きなんだけど、その角に出来た雑貨屋さんがさ——」

やべえ、楽しい。

大通りのカフェに入店した僕らは、アンティーク調の椅子が三つ等間隔で並べられた円形のテーブルで席に着き、銘銘好きなスイーツや飲み物を注文して若干早めのおやつを摂っていた。ちなみに、琴里さ

んはレモンタルトとブルーベリージュースを、村雨さんはパンケーキにアップルティー、僕はフオンダンシヨコラとモヒートそれぞれオーダーしている。

お互いの食べているものを少しずつ交換したりしながら、身近な出来事や近所のお店の話題を肴にして盛り上がる。これが、噂に聞く女子会という物なのだろうか。代金は僕の給料から引かれるという話だが、この心安まる一時の代償なら気にはならない。お、このレモンタルトも中々美味しいな。

「……む、そう言えば」

フオンダンシヨコラを味わっていた村雨さんが、その小さな一口分を食べきると同時、思い出したように切り出した。

「……以前から、琴里に尋ねようと思っていたことがあったのだった」「ん？ なーに？」

しかし村雨さんはそこで言葉を句切り、僕の方をチラと見やる。

「もしかして……男がいるとまづい話題です？」

「……そうではないのだが。……いや、他のクルーならともかく、智也なら問題ないだろう。なにせ、シンと共に前線に赴く人間だ」

「へフラクシナス＜関連のコト？」

「……ああ、初歩的なことで申し訳ないのだが、何故シンが精霊との交渉役選ばれたんだい？」

「んー」

村雨さんの問いに、琴里さんは眉根を寄せて難しそうな顔をする。

「二人とも、誰にも言わない？」

「……約束しよう」

「僕も誓います」

なにやら先ほどまでとは違い、少し真面目な話のようだ。それを察し、僕も茶化すことなく琴里さんに首肯を返す。

その様子を見た琴里さんは、数秒間何か考え事をするように押し黙った後、説明を開始した。

「実はね……私とおにーちゃんって、本当は義兄妹とか言う超絶ギャルゲ設定なの」

「……ほうっ？」

「へえ………へえ？」

そいつは驚愕の事実である。あの仲の良さで義理の兄妹とは………フラグ乱立待ったなしである。許羨、もとい許せん。

……いやしかし、それとこれとに何の関係があるのだろうか。村雨さんの質問は士道さんの選出理由であって、五河家の内部事情ではない。

そう疑問に思ったのは村雨さんも同様だったらしい。結果、僕ら二人は揃って小首を傾げる事となった。

「最後まで聞けば分かるから、そんな二人して小型犬みたいにしないでよー」

「はあ…了解です…」

「そんでね、私が何歳の頃って話だったかなー、まあそれこそ覚えてないくらいの時にね、おにーちゃん、本当のお母さんに捨てられて私たちの家に引き取られたの。私はまだちっちゃかったから当時のことは知らないんだけどさ、養子になったばかりの頃は相当精神がやられちゃってたみたいなんだ。それこそ、自殺しかねないくらいに」

「そりやまた………難儀な……」

「………」

そのショッキングな内容故か、村雨さんがピクリと眉を揺らす。言葉は発していないが、何かしら感じるどころがあるのだろうか。

無表情な村雨さんにしては珍し——ん？

何か、小さな違和感があった気がする………？

「………続けてくれ」

おっと、話の途中だ。余計な考え事はやめておこう。

「ん。ま、その状態は一年位したら治まったらしいんだけどさ、きつとその頃からなんだよねー。おにーちゃん、人の絶望にすつごく敏感なの」

「絶望に………ですか」

「うん。要は、その時の自分みたいな顔してる人って事かな。こう………自分は誰からも愛されたいんだーとか、自分を必要とする人なん

かいるわけないんだーみたいなの、そんな顔してる人を見つけるとね、おにーちゃん相手が初対面でも無遠慮に突っ込んでくの」

だから……と言って、琴里さんは目を伏せ、続ける。

「おにーちゃんしかいない……って、思ったんだよね。精霊に自分から向かっていけるような奇特な人なんて」

「……なるほど」

「……………」

想像していなかった内容の話を聞きながら、僕は以前へフラクシナスのブリッジで琴里さんが言っていた台詞を思い出していた。

《んー。まあ、土道は特別なのよ》

僕はまだまだ琴里さんとは付き合いが浅く、彼女について理解できていない部分や知らない一面も多々あるが、なんとなく分かることもあった。彼女は隠し事をしたり話をはぐらかす時、下手に嘘は吐かずに明確な言い方を避けるなどしてミスリードを誘う傾向にある。

嘘を言わないのは恐らく根本の部分が「いい子」であるからだろう。ミスリードを誘うことが多いのは司令官モードで身につけた一種の処世術か。

その琴里さんが、はつきりと「土道は特別」と言ったのだ。土道さんが実は養子であったというのも、まあ中々普通とは思えないような凄惨な過去ではあるのだが、言ってしまうえば世の中に溢れる大量の不幸の一つに過ぎない。母親に捨てられたのだという土道さんに比べれば大したことはないかもしれないが、僕だって生まれてすぐ親を亡くしているくらいだ。

琴里さんは非常に聡い人物だ。それは妹モードであろうと司令官モードであろうと変わらない。そんな彼女が、捨て子である位のことを「特別」と称するとは考えられなかった。

きつと、まだ何かある。

「琴里さん」

「……………」

それらの意見を全て眼差しに乗せて、琴里さんを真っ直ぐに見つめる。

村雨さんも無言無表情のままではあるが、琴里さんを捉えて動かない瞳には問い詰めるような意思が含まれている気がしないでもない。「……………ま、一般人のおにーちゃんを作戦に組み込んだ時点で、怪しまれるのは当然だよねー。いいよー、そのうち皆知ることになるだろーし、教えといたげる」

……………なんと。

少し、拍子抜けであった。

てつきりとぼけられるかと思っていたのだが、琴里さんは肩を軽く竦めて諦めたような仕草を見せると、そう言っただけ息を吐いた。

そして一度区切りを付けるためか、自分のブルーベリージュースのストローを啜えて、グラスの四分の一程残っていたそれを一気に吸い込みはじめる。

琴里さんが飲みきるまでの数秒、僕達の間を沈黙が満ちた。周囲の喧噪が耳につく。後ろの方から、カランカランというドアベルの音色と、元気のいい店員の「いらっしやいませー」との挨拶が聞こえてきた。

——と、その時。

「ぶふうふうふうッ!」

小さく可愛らしい口内にたっぷり含まれていたジュースが琴里さんの唇から勢いよく吹き出して、彼女の前方に座っていた僕と村雨さんの全身に降りかかる。

「……………」

「……………」

一体何事だ、何故僕はぶ濡れになっているんだ。こんなただのご褒美じゃないか。いやいやまてまて、落ち着け落ち着くんだけ百目鬼智也よ。荒ぶる余りに踊り出しそうな感情を表に出してはならない。こんな時こそクールになるんだ。もしもここでこの歓喜に震える心が顔に表れてしまえば二人にドン引きされ僕の社会的地位は死を迎えるだろう。絶対にこの幸せは琴里さんと村雨さんには気づかれてはならない。

「……………何かあったのかね、琴里」

「うん……ちよつと、世にも奇妙な光景が目に入つて、それが非科学的かつ非現実的で……」

大丈夫、僕は大丈夫だ。思い出すんだ、施設で暮らしていた日々を。自分の本心を隠して偽物の表情を顔面に貼り付ける生活を十年以上続けていたんだ。相手を騙すのはこれ以上ない得意分野じゃないか。僕ならこの窮地を乗り越えられる筈だ。考えろ、こんな時、どんな発言をするのが最も自然に見えるかを、その発言に合う自然な仕草を。この場合は……こうだツ！

「うう……びしょびしょですよ……一体何を見たんですか？」

「えつとね、あれ」

「……？」

よしっ！ 第一関門突破！ 琴里さんに違和感を抱かせることなく会話をつなぐことに成功した。このまま脳をフル回転させ、顔に貼り付けた

しかめっ面の表情が崩れないよう注意しながら、同時進行で体中にベタ付いているこの聖水の間接感を脳に焼き付けるんだっ！ つて、違うそうじゃない！ 何を考えてんだ僕はツ、完全に変態じゃねえかつ！

「……どれ」

「あつ、令音……」

「……」

琴里さんが指さしていた方向に、村雨さんがゆっくりと振り向いていく。僕も見たい所だが、興奮冷めやらぬ心臓を落ち着けるので必死なのでそんな余裕はない。

村雨さんは徐々に首を回して行って、完全に振り向いてその光景が見えたであろうところでぴたりと止まる。

数秒後、後ろを向いた時以上にゆっくりとこちらに首の角度を戻して、カップを手に取り、ほとんど減っていなかった角砂糖たっぷりのアップルティーを口に含み——ブーッと、僕らへ吹きかけた。

「……なまらびっくり」

何なんだ、何だつてんだ。今日の僕は何なんだ。一度ならず二度ま

でも女性の口内を経由した飲み物を浴びるなんて。どうしてこんなにご褒美を貰えるんだ。……いやだから違えだろそうじゃねえだろ。これはご褒美ではなく不運だ、アンラッキーな出来事なんだ。やめろ、喜ぶんじゃない僕の中に眠る変態性！ よせ！ 生まれ！ 鼻腔をくすぐる二人分の飲み物の香りを記憶しようとするな！ あと村雨さんなんで北海道訛り!?

「……智也も見ると良い」

つくう……！ 今はそれどころではないのだが……、かといってここで振り向かないのは流れとして不自然か……。

ええい、ままよ！

「シドー、今度のここは何を扱う店なのだ？ きなこパンはあるか」

「いや、さつきみたいなのパン屋ならまだしも、ここはカフェだからきなこパンはないぞ」

「む、そうか……きなこパンはないのか。口へと運んだ刹那に広がる薫風、脳髓を心地よく支配する甘さ……また食べたいのだが」

「前の店で散々食つたら、しばらくは我慢しとけ。この店にだって旨いもんはあるからさ。新地開拓すりゃいいじゃねえか」

「ふん、きなこパンほどに私の心を魅了する甘味など、そうそうあるとは思えんがな」

「コラ、店員さんの前でそういうこと言うな。ほら十香、このケーキなんか美味しそうだろ」

「けえき……？ よく分からんが、シドーの勧めなら食してみるか……おい売子、このけえきとやらを十寄越せ」

「ちよ!? 待て待て待て！ 十個も頼むな！ さつきのお前の馬鹿食いで結構財布が軽くなってるんだよ！」

「? どういうことなのだ？」

「だあかあら！ 十香のせいでもう金がなくなりそうなんだって！ ケーキ十個も買ったら千円も残らねえよ！」

「むう……金子が尽きたのか。仕方ない。ならばこの売子から手っ取り早く奪うと——」

「!? お、おい！ やめろ十香！ 暴力は駄目だ！」

「何故止める！」

「つたりめーだろうが！ 簡単に人を傷つけようとしちゃいけないだ！」

「ならばどうしろと言うのだ!?!」

「お前が！ 食べる量減らしゃ!! 済むんだよ!!!」

.....

スー……（僕がゆっくり正面に向き直る音）

コトツ、チュー（モヒートを手に取り、ストローで吸う音）

.....（一瞬の静寂）

ブツ……（察せ）

へラタトスク機関のスタッフは、その全員が特殊な訓練を受けている。戦闘訓練などは言うに及ばず、怪我の処置や隠密行動、その他あらゆる事態に対応するための努力を日々積み重ねているのだ。

全ては円滑に精霊とのデートを進めるため。世界を破壊する存在に、恋を知ってもらうため。

そして本日、その訓練の成果の一端を見せる機会が遂にやってきた。

通常とは異なり、空間震なしにこの街に姿を現した精霊・十香。後に静粛現界と名付けられたこの方法により、自らの意思で士道さんにご会いにやってきた彼女は、学校が無い（物理）のにそれを忘れて登校していた彼と合流し、そのまま士道さんにリードされる形でデートを開始した。

誰もが完全に意表を突かれた出来事であり、その余りの衝撃にへフラクシナスの司令官・解析官・一般協力者の三名が何故か皆揃ってビッショビッショのベッタベタになるというトラブルが発生したが、そこは世界を救うという大義を背負ったへラタトスク機関のメンバー達、すぐに冷静さを（一周回って）取り戻し、ある作戦を執行したのだ。

その名も、作戦コードF-08・オペレーション「天宮市の休日」。明らかに某名作恋愛映画をパロった名称のこの作戦だが、その内容は緻密にして効果的。ヘラタトスクのスタッフを総動員し、天宮市の至る所にデートを満喫させるためのイベントや設備を配置。場合によつては、巨大な建築物さえ専用の顕現装置（リアライザ）を用いてごく短時間で完成させてしまう程の規模の大きさである。

当然、スタッフ達はこのシチュエーションにも対応する。なんと彼らはこんな事態（精霊との街中デート）さえも想定し、全員劇団で一ヶ月間の演技講習を受けているのだ。

今この時こそが自分たちの天王山、世界を救えるかどうかの分水嶺だ。表面上はにこやかに街を歩くしがない一般人を装いながらも、スタッフ達の心境は戦場（いくさば）に立つ兵（つわもの）のそれであった。

ところで、だ。

村雨さんから渡されていたインカムに話しかける。

「琴里さん。なんだって僕は彼らのデートをストーリーキングしてるんですけどっけ」

『もしもの時に即座に動いてあの二人を守る人間が必要だからよ』

「その人員が僕であった理由は？」

『……智也ならその役目を果たせると踏んだからよ』

「もひとつ質問良いですかね。今回のこの作戦に追加メンバーを入れられる枠、ありましたか？」

『……あなたのような勘の良いガキは嫌いよ』

「やつぱり余りモンですか！ 体育の授業でペアを作れなかったボツチみみたいな扱いですか！」

「いいや、百歩譲ってそこまでは良い。わざわざ緊急時に暇してる奴を放っておく理由はない。だが！」

「せめてシャワーくらい浴びる時間は無かったですか?!」

「おかげで無駄に全身いいにおいしますわー！」

「ついでにベッタベタだし！」

時刻、正午。

お昼時を迎えた天宮市の賑わい方は、僕が琴里さんと村雨さんに奢ったカフェに入る前の時間帯よりさらに盛大だ。

今士道さんと十香さんは少しお高めのレストランでランチタイムをほのぼのと楽しんでいる。士道さんの財布の中身に関しては、既にティッシュ配りのアルバイトに扮したヘラタトスクンスタツフの尽力により補給されていた。ついでにインカムも何故か自販機から出てきて士道さんの手に渡っている。

一応注釈しておく、今デートしている二人は来禅高校の制服を着ている。兄妹揃って学校が臨時休校なのを忘れていた士道さんは良いとして、なんで十香さんまで制服を着ているのか。それに関してはデートの際を使って士道さんが説明してくれた内容曰く、「十香が自分で作った」らしい。

どうやら十香さんは、自らの身につける物を靈力を物質化させることで顕現させられるようだ。チート流石精霊チート。

んで、肝心の僕はと言うと、琴里さんの指示でいそいそとストーリーキングに勤しんでいた。それも、体や服にコーティングされたブルーベリージュースとアップルティーはそのままに、だ。ヘフラクシナスに戻った二人は、ブリッジに入る前にさっさとシャワーを済ませたとのこと。解せぬ。

時間が経ってすっかり乾いたからか、ぱつと見は分からないものの、近づいてみるとなんだかフルーティーな香りがするし、黒のTシャツは良いとしてカーゴパンツは微妙に愉快的なマーブル模様になってるし、とどめに顔や腕の肌が露出している部分はなんかベタベタしている。

心の中に住む変態のペルソナが既に鎮圧されている今の僕には、そのベタ付きは別段ご褒美でも何でも無く、ただ不快なだけだ。あ、ごめん嘘。実は言うほど嫌じゃな——死ぬ。もう出てくん、もう一人の僕。

つまるところ、現状の僕は「秘密結社に所属している、女子の飲みかけジュースで全身ベタベタな、絶賛ストーリーカー中の変態男子高校生」なわけである。字面が酷い。

『どう？ 智也。そこから見て二人に何か変化は？』

「今のところは平穩無事そのものです。雰囲気も良好そうですし、いっそ妬ましいほど——」

「——百日鬼智也」

「はいはい？」

通信に夢中になっていたら、背後から声を掛けられた。

特に何も考えずに振り返ってみようおっほう!?

「何をしていたの」

国の極秘部隊に所属している、思い人の体操服をクンカクンカするのが趣味な、ガチ物変態女子高生がそこにいた。

というか、普通に高校の制服を着た鳶一さんだ。

いや、普通にとか考えてる場合ではない。ちよつとこれやばいのはなからうか。

『智也』

琴里さんが僕の名を呼ぶが、皆まで言われずとも分かっている。鳶一さんはAST隊員だ。土道さんと十香さんのデートを知られるわけにはいかない。なんとかして誤魔化す必要がある。

質問に質問を返すのは失礼に当たるが、ここは仕方が無い。急展開にビビっている心臓をなだめ、表情筋を操作して顔から緊張を消し、全ての準備を一秒以内で終わらせて鳶一さんに話しかけた。

「そういう鳶一さんは、何故ここに？ 制服を着ておられますが、今日は学校無いですよね」

「間違えて登校してしまった」

あんたもか。

「帰ろうとしたら、土道を見かけた」

「……それ、朝の出来事ですよね」

「八時」

「それからずっと土道さんの様子を見てたんです？」

「そう」

「つまり鳶一さんは、現在ストーキング中でOK？」

「違う。これはストーキングではなく、ただのコミュニケーション」

一方的かつ陰湿にも程があるコミュニケーションもあつた物だ。

『智也、マズいわよ。彼女が士道の後を付けてたなら、十香の存在に気づいていない訳が無いわ。変にとぼけるのは危険よ』

琴里さんからの言葉でハツとする。言われてみればそうだ。士道さんに狂気じみた恋愛感情を向けている鳶一さんのこと。士道さんと共にいる十香さんを見逃すとは思えない。以前、士道さんの隣にいた僕の存在には気づかなかつたという事例があるが、あの時とは違い十香さんは女性。あまつさえ士道さんとデートをしているのだ。鳶一さんからしてみれば恋敵そのもの。流石に気づいていない訳が無いだろう。

そして、十香さんの存在を把握しているなら、当然その正体も分かっているはずだ。十香さんは鳶一さんとある程度の面識があるような台詞を言ったことがある。確か、《また……お前か》……やめろ。その目は、嫌いだ……!》との内容だった筈だ。

つまり、彼女らは戦場にて何度かぶつかった事があるのだろう。なら、確実に気づいている。

「もう一度聞く。何をしていたの」

「それがですね……ちよつとアレを……」

作戦変更だ。敢えてこちらから士道さん達の方を指さし、口から出任せを吐く。

「散歩中にあの二人を発見しましてね……ちよつと気になって、観察してたんです」

鳶一さんから見て僕という人間は「偶然事情の一部を知ってしまった一般人」である。もしも僕が〈ラタトスク機関〉などとは無関係で、その認識のとおりの人間だとしたら、偶然散歩中に士道さんと謎の少女のデートを見かけた無知な僕はその時どう動くか。それをイメージしながら話す。

よく、うまく嘘をつくコツは真実を織り交ぜることだと聞くが、もっと簡単な方法がある。すなわち、まず自分を騙せば良いのだ。自分の言葉が真実であると自分自身が誤認していれば、言動に怪しさなど無くなる。

「鳶一さん……一応訊きますけど……あの土道さんと一緒にいる少女、あの時のドレスの少女と同じ、ですよね？」

自分の中に設定を作り上げる。完成した設定を自らに落とし込む。その二工程の自己暗示を以て、僕の嘘は僕にとつての真実となる。

これは、二度目の人生で僕が身につけた人を欺くための手段だ。

「空間震は、人間が起こしているのですか……？」

A S T 隊員を完全に騙す。

琴里さんや土道さんも含めた全てのヘフラクシナスメンバ―が、デートと言う名の戦争をしている中。一般協力者の僕もまた、そんな戦争を始めることとなった。